



8月初旬の蒸し暑い日であった。  
 中学3年生の受験の夏であったが、湿度と暑さのハイブリットに茹だるような怠い気分と小都華の気分はリンクしていた。  
 受験勉強にも身が入らず両親の小言を避けて、惰性の様に神社の巫女のバイトに向かった。  
 パートナーデジモンであったクダモンも暑さにやられて茹だっている。  
 「はぁ～、中学最後の夏になんちゅう色気のない生活や…おんもおかんもあ言ってるけど別にレベル下げてもヤンキー校でもない普通校だって楽勝やってのに…なあくダモン？」  
 「そうだね～フェルナンデスだね。」  
 「完全に脳溶けとるな、はぁウチの青春ってとんだ灰色やなあ…。」  
 バイト先に着くと神社の神主に珍しい来客があった。  
 神主の知り合いの警察官という人物であった。  
 「おおきに、なんや刑事さんっておっちゃん遂に悪い事に手出したん？いつかやろと思ってたで。」  
 「ちょっと小都華ちゃん出会い頭に酷くないかい？」  
 ああそうだ丁度いいや、バイトに来たばっかで悪いけどちょっと、お使いにいけないかい？」  
 「なんや？えらい神妙な顔して。」  
 「伽夜子さんと小都華ちゃん知り合いだろ？ちょっと伽夜子さんに依頼したくてね。」  
 「？」

…

神主の依頼の内容は、この2週間で起きた2つの怪事件の解決であった。  
 ある村出身の2名が同じ状態で植物人間で見つかった。  
 最初のひとは、権田 徳三郎(72歳)、二人目は徳田 重蔵(74歳)両名とも独身であった。  
 ふたりが植物状態になった要因は不明で医師もなぜ、彼らが突然同じタイミングでこのような状態になったのか皆目見当もつかなかった。  
 ここまでなら、通常の警察業務の一環で処理する案件であるが、現場の様子が異様であった。  
 糞尿に塗れた被害者達の周りに無数の案山子が立っていた。  
 しかし、被害者含め案山子を誰かが搬入する様子は、監視カメラや周辺住民証言から確認できていない。  
 被害者のひとは住宅地で人の目もある。  
 もうひとはタワーマンションでフロントもあり、搬入は不可能であった。  
 更に不気味な事に案山子には、ある肉片が組み込まれていた。  
 …検査の結果それは、同一人物…つまり人間の肉片と分かった。  
 あまりにも不可解な状況かつ、2名とも資産家で、メディアに嗅ぎつけられ荒らされる前に解決するため、科学調査を信仰する警察が泣く泣く知り合いの神社に頼ったという経過であった。

「話はわかったんやけど、なんでウチだけ？警察のおっちゃんと神主のおっちゃんが行くのが筋ちゃう？」  
 「…あの恰好のひとだろ。  
 初見のひとは信用されないだろうし、古都華ちゃん気に入られてるだろ？」  
 伽夜子…友人の夜光 月彦の自称姉の新進気鋭の霊媒師でここ数年で弟の月彦を連れ立て幾つかのお祓い…というよりも一般に知られていないデジモンが起こす事件を解決している人物であった。  
 その性格は飄々としており、金がありそうなところからはぼったくるは、無関係を決め込んでたら面倒事に巻き込んでくる、極度のプラコンな事で悪い意味で有名であった。  
 服装もはっきり言って痴女一歩手前で、一般人が想像する霊験あらたかな人物ではなく、詐欺師若しくはマニアックな風俗の嬢といった体であった。  
 「んで、本音は？」  
 「いやぁ、僕もあのひと苦手で HAHAAH ! 五千石堂の羊羹持っていていいからさ！」  
 「カス!!」

…

という訳で、伽夜子達の住むアパートに来た。  
 (案外、普通のアパートに住んでるんやな。)  
 聞かされた住所のアパートは2階建て、4戸の平均的なお手頃価格のアパートであった。



「はい…。」

インターホンを鳴らすと、この世の不幸を一身に背負ったような陰気な少年が出迎えた。

「よっ! 元気しとったか! 夏バテしてへんか!?!」

出てきたのは、弟の月彦とパートナーデジモンのコツキガルルモンであった。

月彦は古都華の神社で起こった事件で知り合った高校生の少年であった。

優しい少年ではあるが、陰気、声小さい、気が小さい、写真をそのまま掛け軸にでも貼れば心霊番組の幽霊画でも通りそうな負のオーラに溢れているような少年であった。

近所だったのもあり、そんな月彦を古都華は放っておけず度々絡んだり、世話を焼いていた。しかし、思い返せばこういった遊びに来るなど道すがらではない、プライベートな場所への訪問は初めてであった。

「えっ…古都…ちゃんさん? どうしたんですか?」

月彦は以前、古都華をさん付けで呼んでいたが、余りにも他人行儀なのが古都華は気に入らずなんとか呼び捨て、妥協しちゃん付けを強要した結果、珍妙な古都ちゃんさん。という呼び方になっていた。

「あ〜、ちと伽夜子さんに頼み事あってな。

ほら、五千石堂の羊羹! 一緒に喰おうや!」

「おんや? 古都ちゃんじゃないか。

どうしたんだい? 愛しい私に会いに来てくれたのかい?

ま、入りました。お〜五千石堂の羊羹じゃないか、月彦君麦茶出してくれたまえ。」

…

クーラーが適度に効いた温度、それを少し古めかしい扇風機が部屋全体に送っている。

部屋は本来、洋装であるが、そこに畳を敷いたどこか懐かしい雰囲気であった。

ぼったりく等で稼いでいると思っていたが、想像以上に質素な生活空間であった。

午前9時30分を回った頃合い、レースから漏れる夏の日差しが心地良さを増させていた。

「成程…また、面倒臭そうな案件じゃあないか。

いいよ。羊羹も頂いたしいいよ引き受けようじゃないか。」

「え〜、おっちゃん暑い中働くの嫌なんだけど…。」

伽夜子のパートナーデジモンのブシアグモンがいの一番に羊羹を頬張り一番嫌そうな態度を取っていた。

「羊羹2切れ食べるとして逃げられるとでも? 羊羹分働いてもらうよ?」

「ほんまか? 助かるわ〜。

ほな、どうするんや! ハキハキ指示出してくれ! ウチも手伝うで!」

「いや…古都ちゃんさんは…。」

月彦がおずおずと意志表示をする。

「あ〜!? 何水臭い事言ってんねん!」

「ですけど…聞いた話じゃ危ないですし…そもそも受験勉強しないと…。」

「なんやと〜月彦が随分言うようになったやないか! ええこの!」

「…いはいれすよこひよひゃんひゃん。」

古都華が月彦の後ろに回り込み口を引っ張る。

「ふふ…その辺にしといてあげてくれ古都ちゃん。

月彦君がそこまで言うのは結構珍しいんだよ? お姉ちゃんが嫉妬するくらいにね。

だから、気持ちを汲んであげな?」

「せやかて、伽夜子さん!」

「ふふ、私は行くなと言ってない。

むしろ今回は危なくない範囲で是非協力してもらうよ? セっかくの夏休みだしね?」

「かよほひゃん…!」

「えっ、言っというなんだけど拒否られる思てたわ。」

「被害者がこれ以上でないように、私は被害者が出るのを防ぐ事に注力したい。

月彦君は戦闘面はともかく結界やらは駄目駄目だしね、私が適任だろうから。

ふたりには、事の起こり、今回の原因を探ってきて欲しい。」

「「それって…。」」

「ふふ…私の勘だけどね、セっかくの夏休みだ。

古都ちゃんの気分転換も兼ねて、二人でひと夏の冒険に行ってもらうよ。」





「いやぁ～驚いたわ、話出てからトントン拍子で話進んでビックリやわ。

流石、伽夜子さんやで!」

伽夜子から二人に頼まれたのは、被害者の2人の出身の村に今回の事件の原因がないかの調査であった。

根拠は伽夜子の勘であったが。

「あの…良かったんですか?神社の方とかご両親とか…。

1、2日とは言え、泊まりですし…。」

「ああ?原因調査だし矢面立たんから、気分転換に危なくない程度に頑張れってな!

それよか男と二人旅の方がおとんブチ切れてたわ!

帰ったら殺されっかもな君!ナハハ!」

「ええ…。それ…大丈夫じゃないんじゃ…。」

「安心せえ!んな度胸ないヘタレ言うてなんとか納得させたわ!あっコアラマーチ喰うか!」

「…はは、いただきます。」

「小都華、私も!」

「おう!喰え喰え!ワンコも喰うか!?!」

クダモンが美味しそうに啜え、コヅキガルルモンは我関せず、舌を出して鼻息を立てていた。

「ほんで、その行く村ってどんどこなん?

新幹線乗って来たし、結構な田舎っぽいのは分かるんやけど。」

「あっはい。

蛇穴(さらぎ)村ってとこで、人口2千人程度の小さな村です。

高収益作物の柘榴の産地で一部結構有名ですね…。

隣接市はかなり大きいですね…。

あっ明日、結構大きいお祭りあるみたいですよ…。

ただ、果樹の収益や、今回の被害者2人もそうですけど名士をかなり排出してるとこみたいで合併はしてないみたいです。」

「なんや、ごつつ臭いそうな村やな。」

「…ええ、あと毎年必ず1名以上若年者の行方不明者が出てます。」

「…なんか、もうこの時点で危険ちゃう?」

「…だから言ったじゃないですか…でも、伽夜子さんがああ言うって事はまあ、僕らだけで対処できる範囲って事だと思います…多分。

とりあえず、怪しまれないために文化部でフィールドワークの一環で行くという体で…今日は軽く様子見と今後、部外者がうろちょろしても噂になってもいいように役場へ挨拶に…。

電話はしといたので…。」

「手際いいやんけ!見直したで!」

小都華が月彦の背中をバンバン叩く。

「はは…ありがとうございます。」

「しかし、なんや結構気引き締めなあかんかもな。」



トンネルを抜け、バスから降りるとそこには田舎の原風景が広がっていた。

田んぼの稲が風に気持ちよく揺れ、ひぐらしの鳴き声が響き渡っている。

「あ～ええなあ! こういうの! 古き良き田舎って感じ…ウチも華のJC やけどこういう素朴なものたまにh…」

「はは…涼しくていいでs…」

「…はあ…」

ふたりは、併せて溜息を吐いた。

「君達? 観光か? こちら辺じゃ見ないが?」

近くで田んぼの手入れをしていた初老の男性が話しかけて来た。

「へあ!? …え…あ…あの…がが学校「学校の部活や! ウチら文化部で民俗学勉強しとてな! そのフィールドワークや!」

（あ…ありがとうございます。）

（まかせとき、こういうのは任せとき!）

「あ…ああの蛇信仰について…珍しいのが…あるってっ、役場の方にも連絡しれまふ!!!」

男性は怪訝そうな顔をしていたが、月彦の言葉を聞いて警戒を解いた。

「お～珍しいな、ミシャクジ様の事か。」

たまに来るけど、君らくらいの年齢の子は珍しいな!」

「ははは、ご迷惑おかけします。」

「いやいや、ちょっと前の事件からデジチューバーだかなんだか変なのがうろちょろしててな! 迷惑してんだよ!」

君らも気を付けなよ! あいつら礼儀もあったもんじゃないから!」



ふと、月彦が足元に目をやるとそこには特徴的な石があった。  
「これって蛇石ですか？」  
「おお、流石だね、村との境にあるんだよ。  
これも他のことと比べて多いって結構特別らしいぜ？」  
蜷局のような模様のある石があった。  
「それよかデジチューバーが来始めたってのはやっぱこれが原因なん？」  
「うん、ああ？知らない？去年、村の私有地で焼死体の遺棄事件あったんだよ。  
それから、デジチューバーが勝手にうろちょろしててたな。  
んで、嬢ちゃんが言う様なこれだな…。」  
男性が指さす先には、案山子があった。  
月彦が境界を一步踏み越えた瞬間であった。  
異様な気配が身体を走った。  
「小都華、月彦はん。」  
小都華の後ろにいたクダモンが話しかけてくる、その様子は少し緊張しているようであった。  
「それとな、これはこっそりと絶対他言無用でお願いなんだけど、ここで何かするなら上（かみ）の連中には気を付けな。」  
「上？」  
「そ、役場行けば見えるけど段々になってる土地の上の連中。」  
（異界だ…。）  
蛇石を越えた先、そこは異界、デジタルワールドに近い世界になっていると月彦は感じた。  
「ああ、これ？ほんと迷惑してるよ。  
そのデジチューバーがある事ない事動画にしてなぁ…明日は祭りだったのに。  
誰か知らないけど、役場が撤去しても毎回すぐ立てられんだ。  
なんか生肉入ってるとかで、虫が湧くと稲も病気になっちゃうしな。」





先程、月彦達が溜息を吐いたのはこの光景と臭いであった。  
蛇石の先、境界の先…そこにはおびただしい数の案山子が立っていた。



役場に着き、教育委員会事務局に行くと妙齢の女性が出迎えてくれた。

「ようこそ蛇穴村へ！

ふたりとも若いのに真面目ね！あらもしかしてこれかしら？明日のお祭りに併せて来のは正解よ！結構大きなお祭りなんだから！」

物珍しいのか、素なのか、随分と口の回る女性であった。

「違いますよ、こいつとは同じ部活の友達。

そんなじゃないですって。」

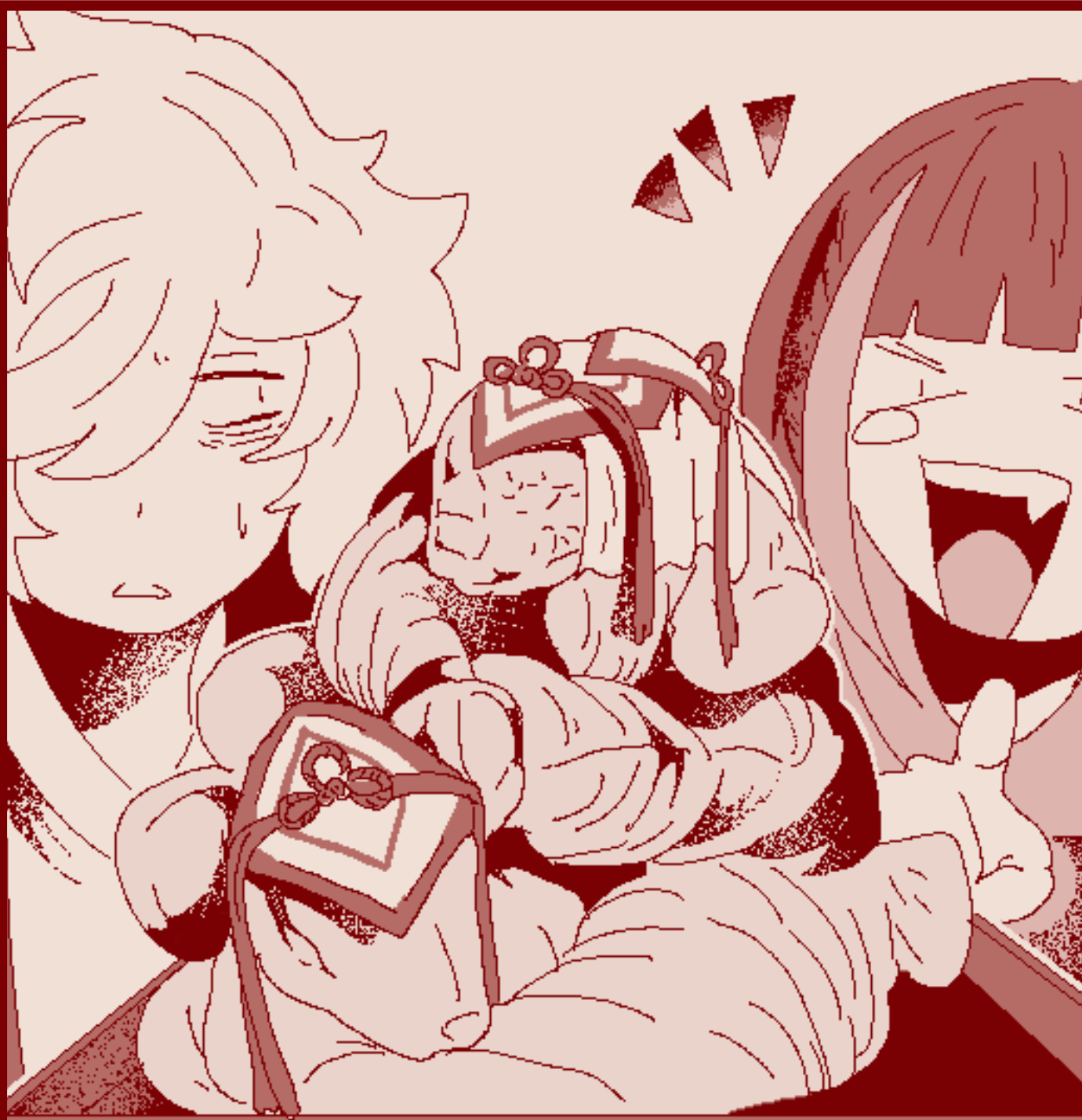
女性と古都華は波長が合うのかすぐに打ち解けているようであった。

（伽夜子さんが古都ちゃんさん同行お願いしたのこのためだったのかな…僕にはできないし、怪しまれるだろうな…ってうお!!!!???)

月彦が小都華の方を見るとパーカーとブラジャーの隙間から乳房がチラリと見えた。

月彦は顔を真っ赤にして顔を背けた。

小都華は何の事かと呆けて見ているが女性はニヤニヤとふたりを眺めていた。



役場に併設されている図書館というよりは資料室にふたりは案内された。  
郷土資料から、今回の事件の犯人…恐らくはデジモン、その痕跡を探していた。  
デジモンは古来より人の意識化のネットワークで発現する事があり、時にケモノ  
ガミなどとも言われていた。

ネットワークを開く回路は何も電子基板のみで開くものではない、仕切り。境界さ  
えあればそこが一種の異界となる…例えば、テープを四角形で区切った枠、エレキ  
テルが発生させる微弱な電流。

人間は微弱な脳波を外部に出している。

それが馬鹿みたいな単純な装置を回路としても、異界と言う特殊な空間で繋がる  
認知の出来ない人間の脳波の繋がりをネットワークとしてデジモンが現れる。

一度構築されたネットワークはそれまでの臃げな存在である怪(あやかし)である  
事をやめ、人の因果を喰いモノノ怪となり、その存在を現実で強固に根付かせる。

回路が開かれるのである。

故に、伝承にその特徴が色濃く表れるため郷土資料は事件の大きな手掛かりとな  
る。

ちよいちよいと小都華が月彦のかたを指で叩く。  
(見てみい!月彦!この郷土品の蛇!とぐろ巻いとるで!ウンコや!ウンコ!)  
(小都ちゃんさん…巫女さんが…というか、年頃の女の子がそんな事言っちゃ駄目で  
しょ。)  
(せやけど、こんなん!こんなん!ナハハ。)  
(…うん?)

「これ、変ですね。」

「?」

「あら?気付いた?」

「なんやアレか?蛇と鼠が一緒になってるんかが?」

蛇信仰は稲に対しての害獣である鼠を喰う事から祀られているものである。

「あ、いや、鼠も豊穰の意味はありますし、地域によっては珍しいですけど一緒に祀  
られている事はあるんですが…。」

「流石目ざといわね、そうなのよ。」

「どういうこっちゃ?」

「いえ、蛇信仰については色々と文献を見たんですけど鼠について触れられてるのっ  
てたしか…。」

「そうなのよ。この郷土品だけ。」

かなり昔の貴重な物らしいんだけど、なぜかこれにだけ蛇と一緒に鼠があるのよ  
ね。

他の調べに来る人も良く分からないって言ってたわ。」

(…!)

「…来る。」

「月彦…?」

「ああああああああああああああ!!!!!!」

「!?」





女性特有の劈くような金切り音に似た高音の叫び声が響き渡った。

「金森さん…。」

女性職員が小さな声で名前が漏れた。

「金森さん？」

「あっいや…あっ！駄目！見世物じゃないわよ!!!」

「あっ！なにやっとなや!？」

月彦が資料室から駆け出し声の方へ向かう。

そこではみすぼらしく汚れた格好をした女性が身なりのいい肥えた初老の男性に縋りついていた。

それを宥めよう、あるいは衆目から隠すように職員が囲んでいた。

何か言っているようであったが、最早言葉の体を成しておらず人ではなく発狂した獣の如くであった。

「あのおばはんは？」

月彦を追ってきた小都華と一緒に追ってきた職員に尋ねる。

「金森さんは…この間までこの課長職だった方なんだけど…後は…その…。」

「…その？」



「おおっと！その辺にしとき…おばはん！」

初老の男の後ろから軽薄そうな狐面の男が顔を出し金森を足蹴りし吹き飛ばす。

「なっ!？」

「汚いおばはんが触っていいような方ちゃうで？国会の議員先生やで？それに文字通り神主様やで？」

「なんや!?あのチャラ男!?幾らなんでも足蹴りはないやろがい!？」

飛び出そうとする小都華を職員が制止する。

「駄目よ。小都華ちゃん。」

大国さんは上の当主様で、隣のは蓮華院さんっていう…その…案山子が立ってからお祓いのために来た拝み屋の方よ…。」

「前の事件って…焼死事件の…その前？に案山子…？」

(なんだ…この視線？誰…いや)

月彦は周りから何人かの視線を感じた。

「なんや君、ガンくれて…ああ嫌々や嫌。

貧乏神みたいな顔しているやん。

不景気移りそうやわ。」

(このガキ…あと後ろの小便臭そうなガキンちょも持ってる側やろか。)

「やめろ、蓮華院。

お前はトラブルを解決するのが役目だろ。

使えん奴だ。」

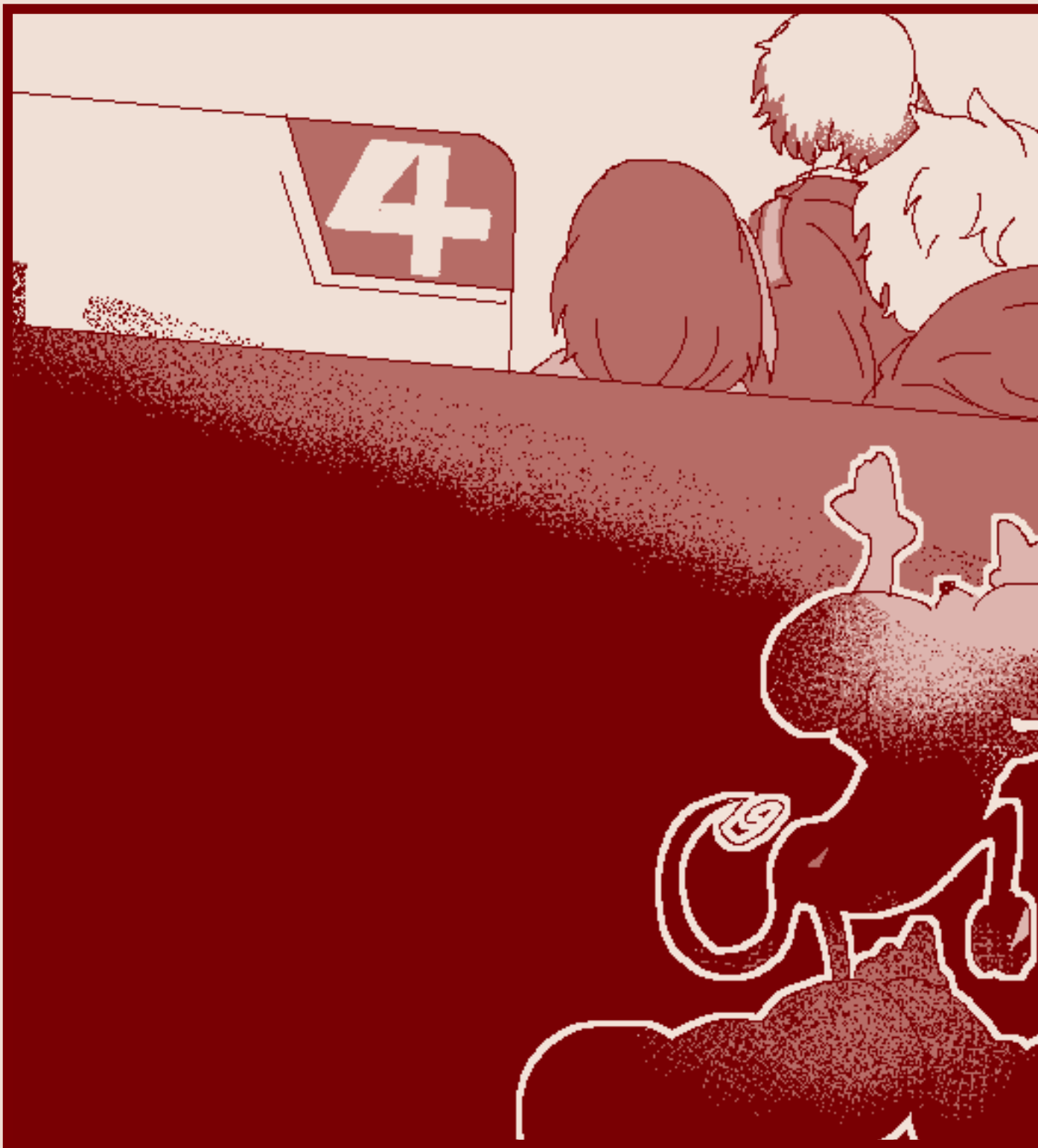
大国は全く今の状況に動じなかった。

というよりも、意にしていなかった。

「おお怖、良かったな貧乏神君。

先生に泣いて拝んどきや。」

「…。」



月彦は蓮華院を見上げるが、意識は周囲に向いていた。  
(先の気配…この女性の叫び声と一緒に現れた…というより釣られたのは間違いなくデジモンと思ったけど、この蓮華院さんもタイマーか？)

そっちと勘違いした？伽夜子さんに比べて僕は呪術も感知も雑だけど…。)

月彦は金森を抱えあげる。

「だ…大丈夫ですか？」

体制を整えると金森は再び劈く声で叫び始めた。

「なんで!!!わわわ私は捧げたのに!!!なのに!!!なんでこんな目に遭わなきゃ!!!!????なんで!!!!!!」

「ふん。蓮華院、余計な事を言う前に黙らせろ。」

「へえへえ。しかし女の劈く声ってほんま不快やわ。」

お婆はんのなんてもう最悪、男の三歩後ろ黙って歩けん女…しかも羊水腐ったお婆はんなんて…。」

殺気に近い、敵意を蓮華院が出した事を察し、月彦そして、小都華が間に入り込む。  
「なんやさっきから聞いとりゃ!全部が今の時代のコンプラ反してるやんけ!クソダラが!」  
(…!)

月彦は何か、迫っているように感じた。

(先と同じ気配…やはり。)

カリカリと音が鳴り始める、一方ではなく周囲全体からであった。

(これは鼠の音…。)





「あ〜あ、ホンマ小便臭いガキンチョって嫌いや…わ!」

「!?」

蓮華院が懐から何かを勢いよく抜き出す。

小都華が構え、一步月彦も懐に手を入れて飛び出す。

月彦と蓮華院は女性ではなく、気配の方向へ札とデジヴァイスを向ける。

…しかし、そこには何もいなかった。

(気配もない、逃げられた?それとも気のせい?)

「何やってるんや君ら?」

その機に併せて周囲の職員が金森を後ろの会議室に避難させる。

「ちっ、まあいい蓮華院行くぞ。」

「へえへい、先生。」

大国は一瞬だけ月彦達を一瞥した。

そこには、威圧の気配、騒ぎを起こすと容赦しない意を感じ取れた。

「…!」

「どうしたん?月彦?」

「駄目だ!戻れ!!!!!!」

月彦の叫び声と共に鼠…チュウモンの群れがあらゆる場所から上がって来た。

「な…「きゃああああああああああああ!!!!」

金森の劈く声とは違う若い女性の叫び声が上がった。

「小都華さん!!!ここを頼みます!!!!」

「まかせとき!!!」

狐目!お前も手伝い!!!!」

「なに寝ぼけてんねん。嫌に決まってるやろ?

僕は先生に雇われてんねん。

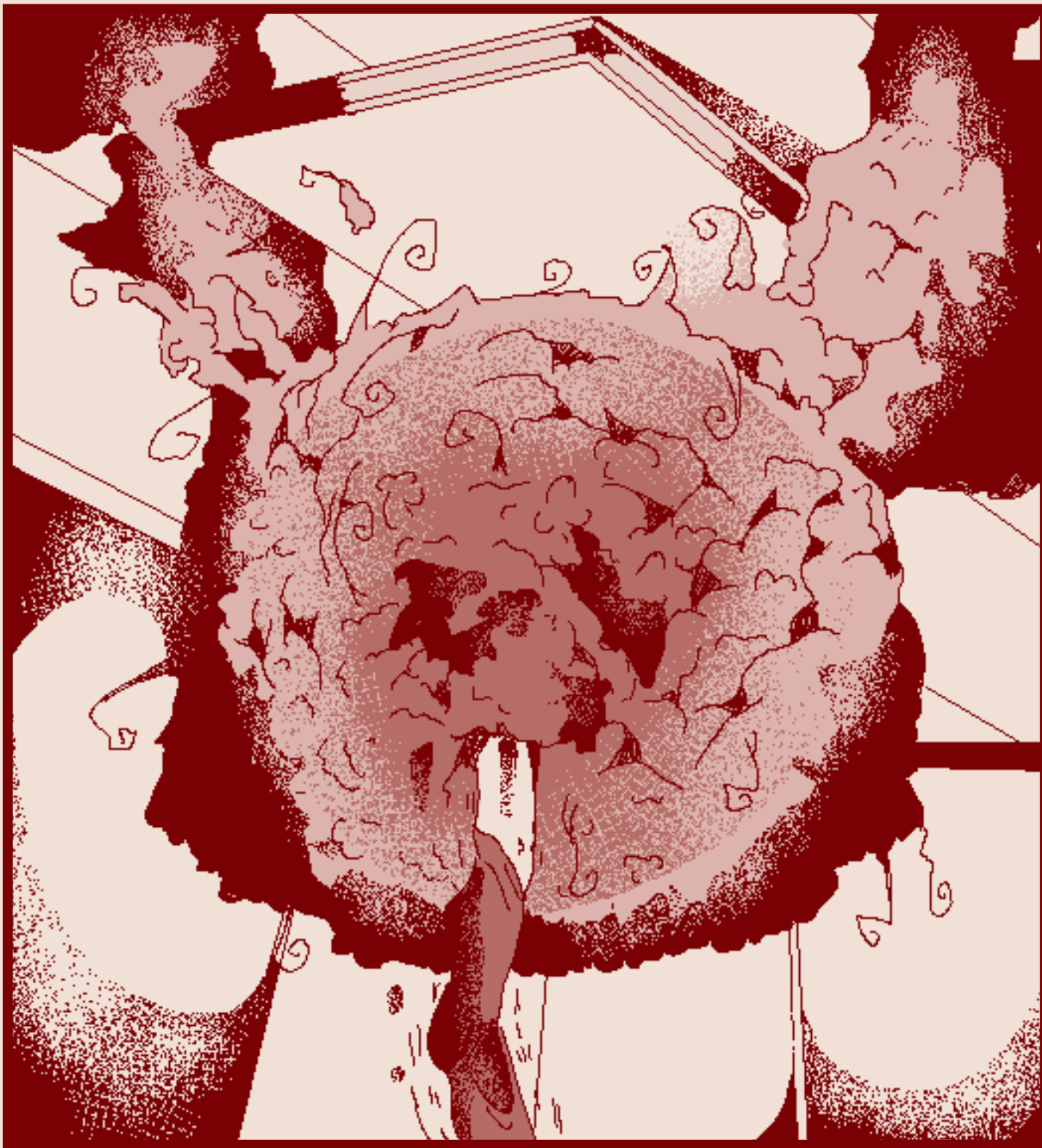
誰が死のうが関係ない、せやろ?先生?」

「と…当然だ!わ…私がこの国に…村にどれだけの事を!!」

「チッ、クダモンいくで!!!」

「あいよ!」

「クダモン!ワープ進化!!!!!!」



会議室の扉を開けるとそこには、端で怯える女性と鼠の塊が見えた。  
(先、金森さんを連れて行った職員の方、じゃあ金森さんはど…!)

耳を澄ますと齧る音が聞こえた。

チュウモンの塊から脚が見えた。

「かかかか、金森さんが!!!突然!!!!」

チュウモンの眼が一斉に月彦に向き飛びかかって来た。



「コヅキガルルモン!!!」

デジヴァイスからコヅキガルルモンが飛び出す。

月彦とコヅキガルルモンは二手に分かれ、コヅキガルルモンが背後から出した鬼火でチュウモンを焼き払おうとするが、何匹か焼き払ってもすぐに奥から別のチュウモン達が群れとなって迫ってくる。

分かれた月彦は職員の女性を掴み入口へ投げ飛ばす。

「早く安全なところへ!金森さんは僕達が助けます!!!」

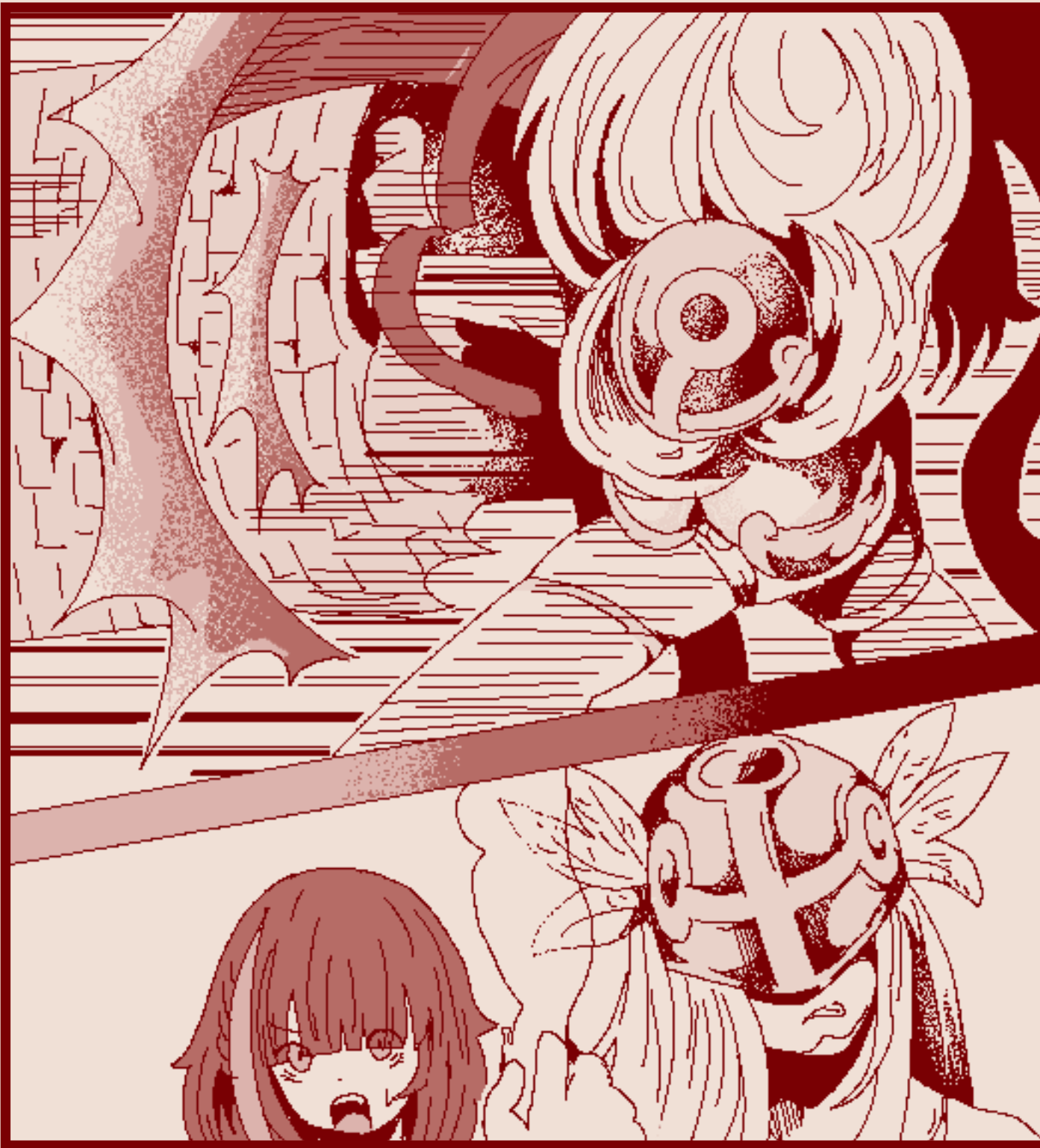
背中に仕込んでいた鉈を振り下ろし職員に向かおうとするチュウモンを吹き飛ばし、扉を閉める。

(クソ!この狭さじゃミカヅキガルルモンでもマンゲツガルルモンでも動きが取れない…!)

月彦とコヅキガルルモンはなんとかチュウモンの群れを避けるが徐々に捌き切れなくなっていた。

(不味い…!)





「月彦! コヅキガルルモン! 出来るだけ低く屈め!!!」

小都華の声を聞き、月彦はチュウモンの群れの中の金森を飛びかかる形で群れから引き釣り出し、うつ伏せになった。

小都華が神札を全方位に部屋の隅々に張り付けていく。

「準備ええか!! エンジェウーモン!!!」

「おうよ!!!」

神札が収縮し、チュウモンを巻き込み小さく正方形にまとまった。

「[ホーリーアロオオオオオオオオオおおお!!!]」

エンジェウーモンの拳が正方形の神札に打ち込まれ、中から華を散らすようにチュウモン達が爆散する。

残ったチュウモン達が部屋の片隅に集まり、恨めしそうに月彦達を睨みつける。

「大丈夫か!？」

「ええ…、あ…ありがとうございます。」

金森さんも齧られていますけど、跡も残らないと思います…。」

「しかし…なんちゅう恨めしそうな目で見てくるんや…。」

「鼠だけに?」

「だあっとれ、エンジェウーモン。」

「何を怒っている…。」

「怒ってる?」

『ドウセ…マツリガハジマレバミンナ死ヌ。』

ミシャクジ様ニ喰ワレル。』

そう言う、チュウモン達はいずこに消えていった。



「様子を見にすれば…なんだこの騒ぎは。」

大国と蓮華院が様子を見に来ていた。

その後ろに、細身の気弱そうな初老の男性もいた。

「大国先生、今の鼠達…やはり祭りに…中止に…やはり子（ね）達が…。」

「馬鹿を言うな！祭りがこの村にとってどれだけ意味があると思ってる！村長の貴様がそんな弱気でどうする!!!」

「しかし…。」

「おうおう!!!議員先生だがなんだか知らんけどな!!!まずはひと守ってくれてありがとうやろがい!!!なんやさっきから偉そうに!!!脳みそまで贅肉になっとんちゃうんか!!!???」

「なんだとお…!」

「小都ちゃんさん…ステイです。」

月彦が小都華を引っ張って戻す。

「ふん。行くぞ蓮華院。」

とにかく、祭りは必ず行うぞ!いいな!!」

そう大国は吐き捨てるとそそくさと退散して行った。

…

「どうしはります?あの子ら?」

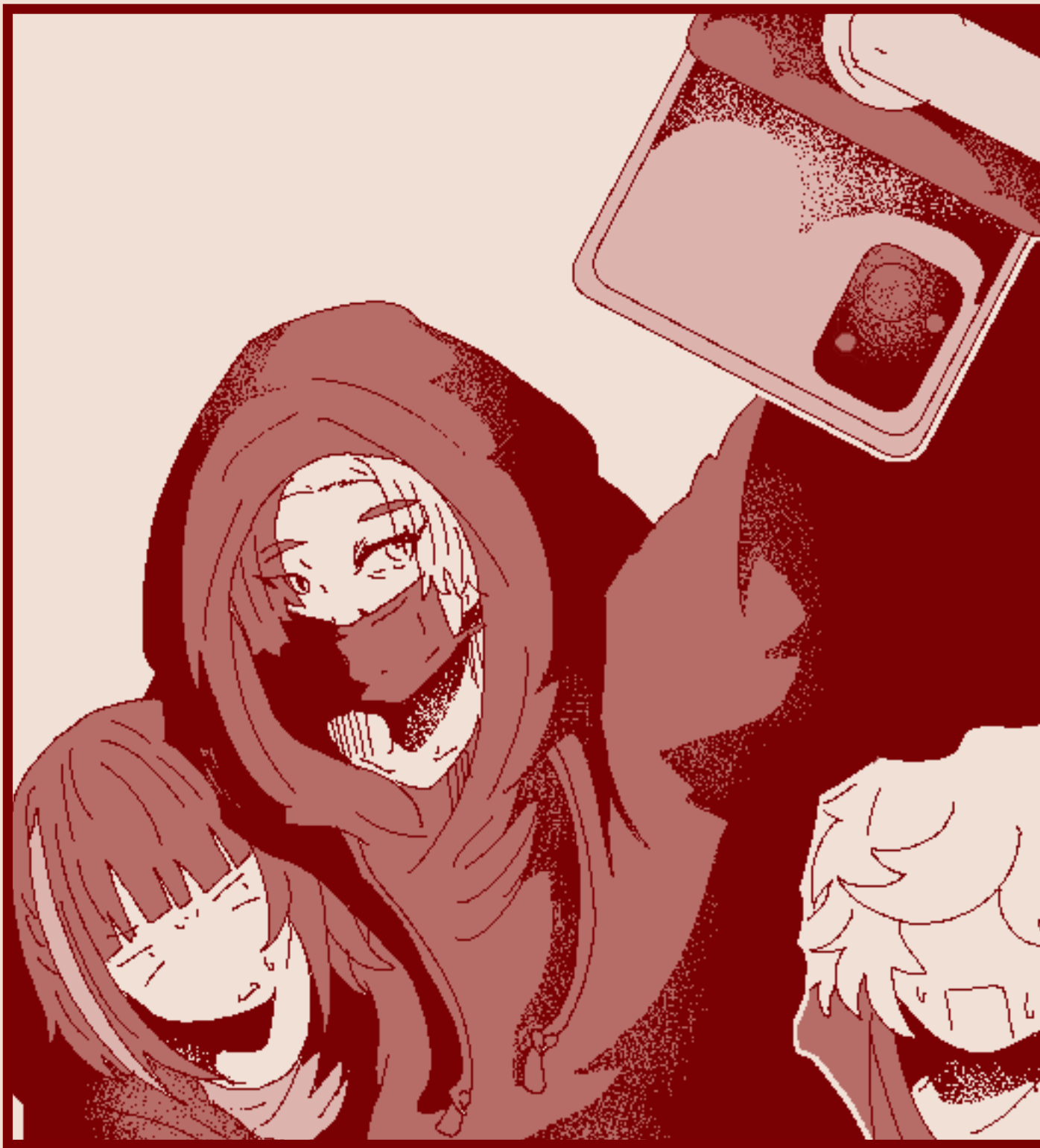
「暫く泳がせておけ、案山子退治に来たなら好都合だ利用しろ。」

他の上の連中にも声掛けして見張らせる。

ただ、もしミシャクジ様を探るようなら…あの動画配信者のように無能じゃない…殺せ。」

「はいで。」

蓮華院が吊り上がった目から黒く濁った瞳を覗かせた。



「小都華ちゃん!月彦君!」

先に、案内した女性職員が心配して月彦達の方へ向かって来た。

その時、隠れていたのか黒のマスクを着けた男が月彦を突き飛ばし、小都華に肩を組み絡んできた。

「すごいじゃん!君!!え?名前小都華ちゃん言うの?

俺さ、心靈系のデジチューバーやっててさ。

ほら、さっきのも撮ってたんだけどさ。

これ公開していい?公開していいよね?いやさあ、去年の焼死事件の動画も俺撮ったんだよ凄くない?」

(なんやこいつ…急に絡んできて。)

後ろで月彦があわあわしていて割り込めないでいる。

「ちょっと、またあなたですか!ひと呼びますよ!」

「やっべ、因習村の迫害受けちゃいそう!しっかり撮ったんかな!覚悟しとけよ!!」

そう言い残すとデジチューバーの男はそそくさと退散していった。

「ごめんね。小都華ちゃん、月彦君。」

「なんやあのチャラ男、キショいわ。」

アレがおっちゃん言ってたデジチューバーかい。」

「ええ、焼死事件を偶然撮ってからずっとここで迷惑掛けてるみたいだね。」

「はあ～迷惑系デジチューバーって奴やな。」

「…小都華ちゃん、月彦君。」

「?」

「このひとのとこに行きなさい。」

職員が渡した紙には、住所と名前があった。

「それとすぐにこの村から離れて、上のひとが何してくるか分からないし、駐在の警官も大国の息がかかってる、来たら補導されるかもしれない。

情けない話だけど、もしかしたらあなた達なら…。」

そういって職員の手引きで裏口から外に出された。





「浄光寺の日舜和尚？なんや坊さんかい。」

職員に渡された紙に記載されたい住所と名前は月彦達が宿泊予定の隣市にある寺であった。「どういう意図かは分かりませんが、どうせこの村での調査は危険ですし、もう無理です。」

それなら行ってみても損はないでしょう。

僕達ならまあなんとかなるでしょうし…。」

「なんや、君にしては楽観的やな。」

「…というよりも、ここよりはマシって感じですかね。」

「あの狐目かい、ウチ、あいつ嫌いやわ。」

軽薄な感じに見えて、とんでもない腹黒やわ。」

小都華が嫌そうな顔でアイスを噛み切った。

「それもありますけど、この村全体の雰囲気…デジモン…いや、モノノ怪、それ以上に人の悪意でしょうか。」

「それも分からんわ。」

さっきの鼠、事件の起こりは案山子やろ？なんで鼠になんねん。」

「…。」

蝉の鳴き声の唸りが大きくなっていく。

「…デジモンは人の心とネットして力を得ます。」

デジモンの発生が彼方昔でそこにひとの数、因果が積み重なっていけば根はひとつでも枝が複雑に絡み合って幾つもの様相を覗き見せる事があります。」

「ミシャクジ様？」

「…上の人達、この村の根を張っている特に大国さん。」

案山子や鼠に対して恐れが見えました、伽夜子さんから頂いた情報だと今回の事の発端の2人も上の出身。

もしかしたら、彼らもコントロールできない毒のある枝が根から発生してるかもしれませんね。」

「…あの鼠、君はすぐいなくなったけど一部のひと…しかもいい年齢の女性ばっかに憑りついてたわ…。」

近くにいたとかやない、明確に狙った。」

「しかも、僕らを見ていた方達…有体に言って上の人達が…今僕達を見ているような人達に。」

「気付いたったんか？というかどうかやって調べたん？」

「…それは、そのコゾキガルルモンに基幹システムに侵入して住民台帳をチョロツと…。」

「君…意外とワルやな。」

小都華がバスを待つ時間にスーパーへ寄った際からであったが、明らかに監視するような目線を向けていた。

今もそれは続いている。

「ウチがスーパー美少女って理由じゃないわな。」

「僕達が来た段階では、特にそんな気配ありませんでしたし、今コゾキガルルモンに各携帯の通話履歴確認したら先の騒動以降の時間、これも登録情報の名前から照会したら住所は上の人達でした。」

「…そういうとこやぞ君。」

小都華が月彦の脇腹を突く。

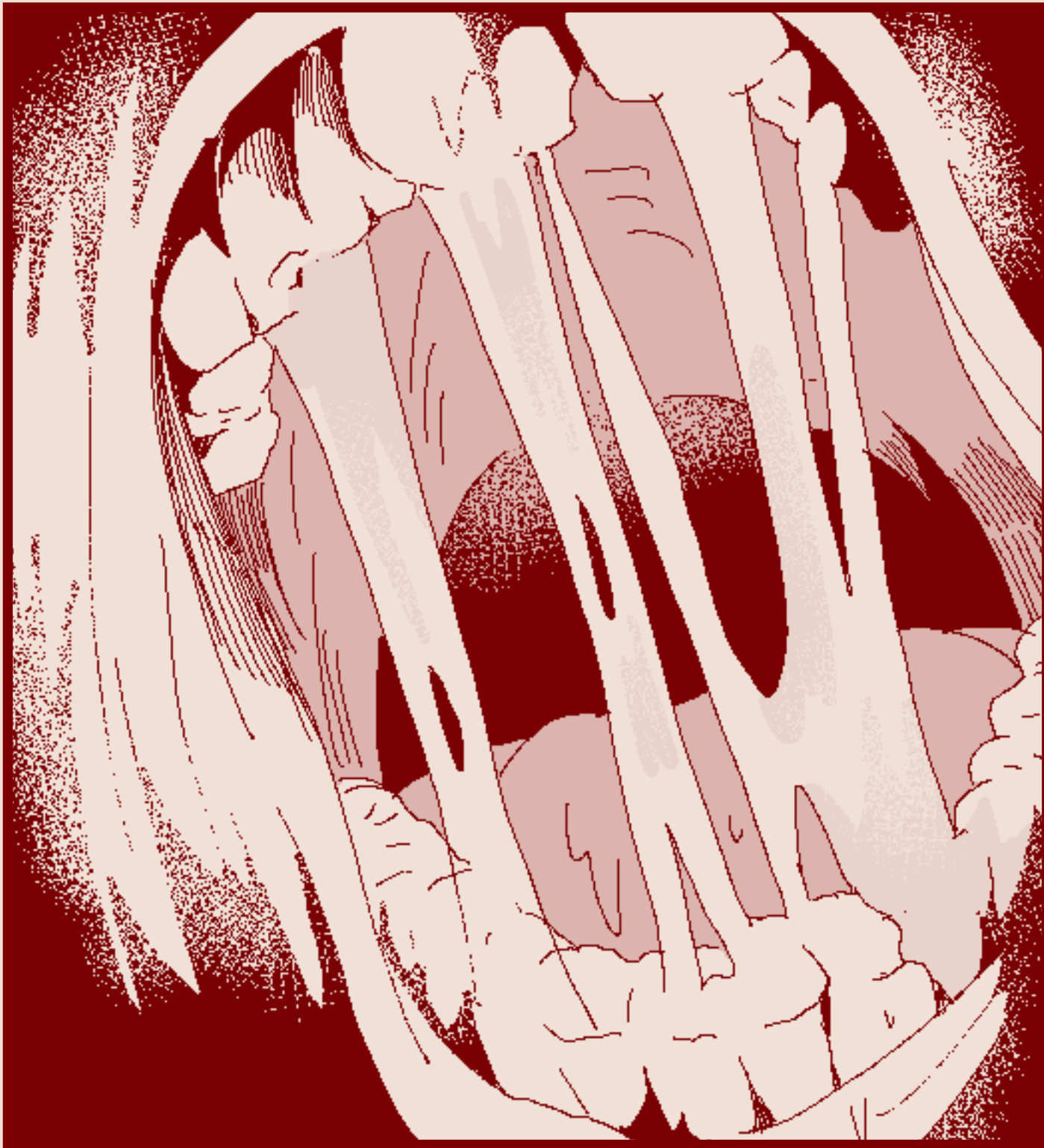
「ええ…なんですか。」

「しかしなら、ウチらはこんなとこで悠長にアイスパクついてバス待っててええんかい？」

セーバードラモンや、ミカヅキガルルモンでさっさとトンズラこいた方がええんちゃうか？」

「上の人達はタイマーじゃないみたいですし、情報共有してれば僕らを襲うなんて派手な事はしないでしょうし、流石に因習があるとしてもこの日本で大勢の人間で昼間っから襲うなんて事はないでしょう。」

下手に刺激してデジモン見られるよりマシですよ。」



そういうと月彦は小都華に見ていたスマホを手渡した。

「そーいや、さっきから何見とったん？エロ動画か？」

「ち…違いますよ。」

『返してえええ!!!私の!!!私のこども!!!!!!』

スマホには、インタビュー形式の動画なのか、インタビュアーに掴みかかる女性の姿があった。

「なんや？これ？ホラー？」

「先のデジチューバーのひと覚えてます？」

「あぁ？あのチャラ男か？」

うお!?結構な登録者数持ってるやん!金持ちなんか!？」

「心霊系のデジチューバーとしてやってるんですけど今はどっちかっていうと迷惑系ですね。」

心霊現象は邪教だとかなんとかで周辺の住民に迷惑掛けたりしてるみたいですね。ちなみにそんなんだから広告単価低いからそんな金ないと思いますよ。」

「なんや雑魚カッペ。」

(凄い現金…)

「ていうかうちらガッツリ撮られてんやん!?ヤバない!?」

「あっそれは大丈夫です。」

消しといたんで、というか話逸れすぎですよ。

動画です、動画。」

「なんやおばちゃんにキレられ…。」

「この村の動画です。」

何本かこんな感じでインタビューというか付き纏いしてたんですけど、大体 50 本くらいのインタビュー動画の中でこういった子供について言及している女性が 10 本くらいあるんです。」

「多いな…。」

「迷惑行為の裏で隠れちゃってますけど、幾つか指摘もある通りちょっと異常ですよ…。」

やらせかと思いましたけど…。」

「実際にいなくなってる訳やな。」

「行方不明も含めますけどね。」

「ウチは首突っ込んででもええんやけど？」

「駄目です。」

日舜さんに話聞いたら、これで終わり。

伽夜子さんに報告して僕らの仕事は終わりです。」

ブーと小都華はわざとらしく不満を露わにした。

「あー…あの!その代わりですけど…その遊びに行きませんか？」

会う時間もまだありますし…報告した後も…その僕…で良ければその…。」

「…行く…行きます。」

小都華は余りにも月彦の感じから離れた台詞に面食らって呆然と答えた。



とりあえず汗を流すために、日舜に会うまでにホテルへチェックインし、シャワーを浴びてロビーに集合する事となった。

「…。」

バスに乗ってからというものの襲われるとかいう別の緊張感でふたりとも黙って、そのままホテルで別れた。

「…。」

(いやいやいやいや、どうせ伽夜子さんの思い付きで拭き込んだに決まってるやろ。

そうに決まってる、なに意識しとんやウチは…。)

「…とりあえずムダ毛もう一回剃っとくか。」





鏡で身体を拭いていく。

身体の水滴がなくなっていく。

「…。」

そうすると自身の胸の高鳴りは温度による為のものでもなく、肉弁を湿らせるものが水滴ではない事が分かった。

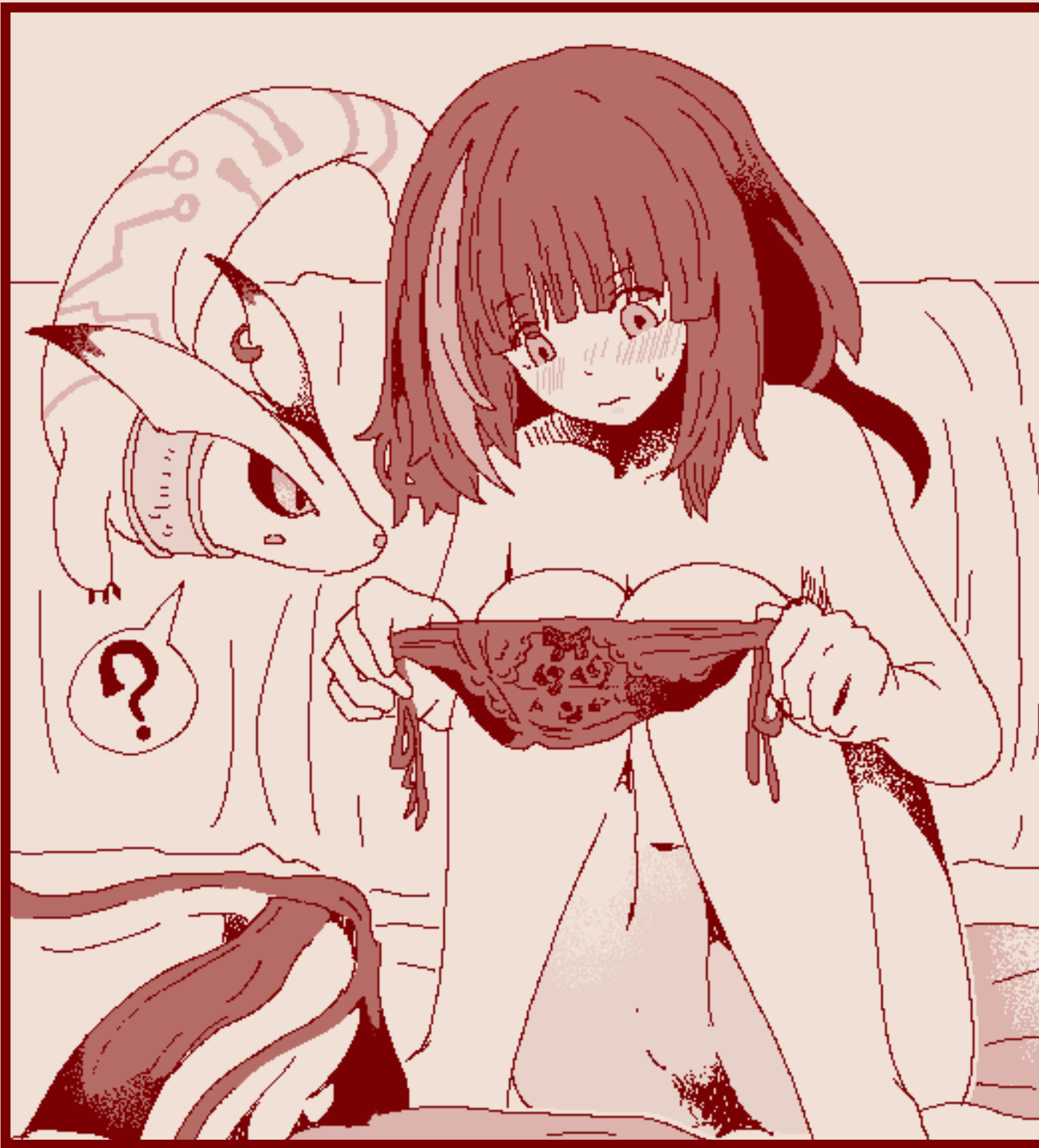
(アホか…ウチ…は…。)

小都華は視線に気づき振り向く。

が、そこにはクダモンも含め誰もいなかった。

(…。)

今までの高鳴りが苦しいまでも好意的に思っていたものが一気に嫌なものに変わった。



「小都華～、早く行こうや～。

　　というかマッパのままだと夏でも風邪ひくよ～。

　　こ～と～か～。」

「…黙っとれ、今覚悟決めっから。」

「意味わからんは、ほんま。」

　　小都華が手にしているのは、そんな事はまずないだろうけど、とりあえず、念のため、幾重にも言い訳を重ねて持ってきた黒の透けてるレースの勝負下着であった。(いやいや…月彦やで、どうせ前みたいに蕎麦屋連れて行かれて梯子外されるのがオチに決まっとるやないか。

　　…ていうかうちら友達やないか。)

「…。」

…

「お待たせ…。」

「あっはい…行きましょうか。」

「お…おう！」

(　　ないないどうせラーメンとか蕎麦とかそんなんに決まってるやん。)



「あの…、夏だしかりき氷とでも思って…女性に人気で…映え？みたいなものがないかなと…そのすみません…キモくて。」

月彦が小都華を連れて来たのはテレビで特集も組まれた和菓子屋であった。

小都華は正直に言って面食らっていた。

月彦はそういった面では唐変木もいいところで、以前も自分が好きなものなら相手も喜ぶだろうと行きつけの蕎麦屋へ連れて行く程の女心のおの字も存在しない輩であった。

…多分に伽夜子が甘やかしたのもあるが。

兎にも角にもそんな月彦がしっかりと女性好みの店に連れて行くなんて天地がひっくり返った様なものであった。

「小都ちゃんさんい…イチゴ味好きでしたよね？どうぞ。」

「意外やな、君そういうのすっとぼけるタイプやと思ったけど。」

「と…友達の好み忘れる程、薄情ではないです…。」

「にしし、せやな。」

月彦は宇治金か？君も好きやね。」

(友達ね…。)

「小都ちゃんさんも覚えててくれたんですか…。」

僕…影薄いですし、忘れられてるかと。」

「…忘れる訳ないやん。」

なっそれ一口くれや、ウチのも一口やるわ。」

「えっあっはい。どう…口開けて何やってるんです？」

「…察しろや、アホ。」

「…っ。」

察したのか月彦の顔が見る見る赤くなっていく。

元が青白いせいかなにやら面白い顔色になっていた。

「…ん。」

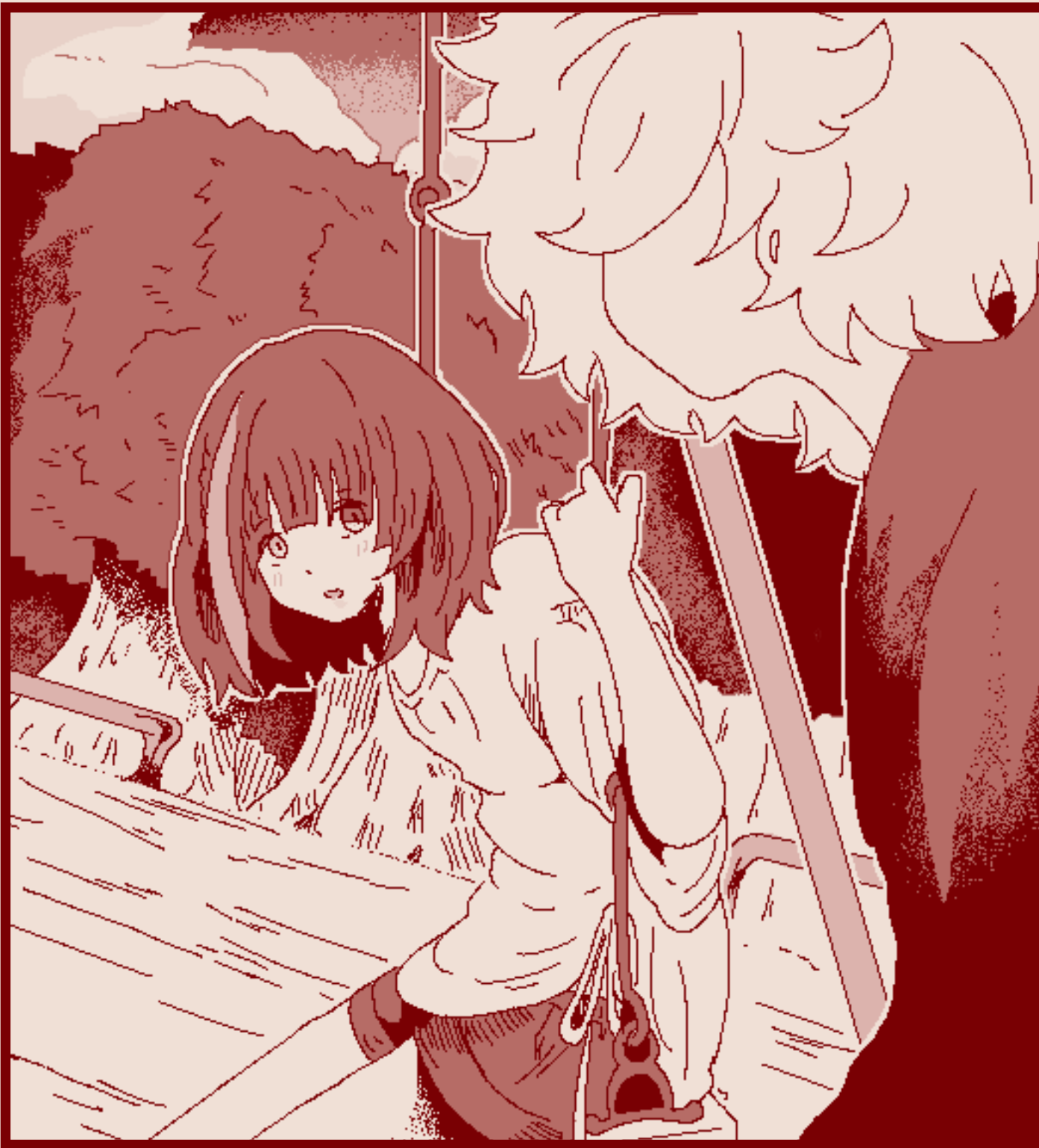
ほれ、君も。」

小都華が今度は自分のかき氷を月彦に突き付ける。

月彦もそれを受け入れ、その後はふたりとも俯いて黙々と食べていた。

クダモン達はふたりが何をしてるのか理解できず、ずっと頭に疑問符を浮かべながらかき氷を食べていた。





夏休みで行われているイベントを見たりとその後も幾つか学生らしい遊びにも行じてみたがどこかやはりぎこちなく時間が進んでいた。

クダモン達が不安そうに見ていたが、ふたりにとっては決して悪いものではなかった。

「まだ時間あるし、少し休憩してから行こか。」

「ええ…。」

公園のブランコにどちらか言うのでもなくふたりは腰を下ろした。

コヅキガールモン達は砂場の方でじゃれついて遊んでいた。

「正直、こんな真っ当に遊べると思わなかったわ。」

あっ先言っとくけど別に馬鹿にしてへんで？

まあ、ちょっと思っただけ、君がここまで考えてくれるのが嬉しかったんや。

例え、伽夜子さんとの真似や入れ知恵でもな。」

「えっ…。」

「?んどうしたん？」

「あーいや…、確かに伽夜子さんにせっかくだから遊んで来なと言われましたけど、どこ行くかは…その僕が考えました…やっぱりキモかったですか？」

「へっ…あ、いや!いやいや…ごっつ楽しかったで…。」

「それは良かった…です。」

「…やっぱ、伽夜子さんともこういうのやってんか？」

「へ?まあ買い物の買えりとかに皆んなで喫茶店とか、伽夜子さんがここ行きたいってところは行きますけど…。」

「ほ～ん。」

「でも、こうやって友達とどこ行こうって自分で考えるのは初めてかもしれません。」

いつも伽夜子さんが先導してくれましたし、友達なんていませんでしたから。

だから…僕も楽しかったです。

よければ今度も…。」

「ああ!まかせとき!んなもんいつでも OK や!明日でもええで!」

「それは流石に…。」

「ま、ならそろそろ時間やし、やる事はきっちりせんとな!楽しいのも台無しや!」

「ええ…、行きましょう。」

「ここで、本当にええんか？」

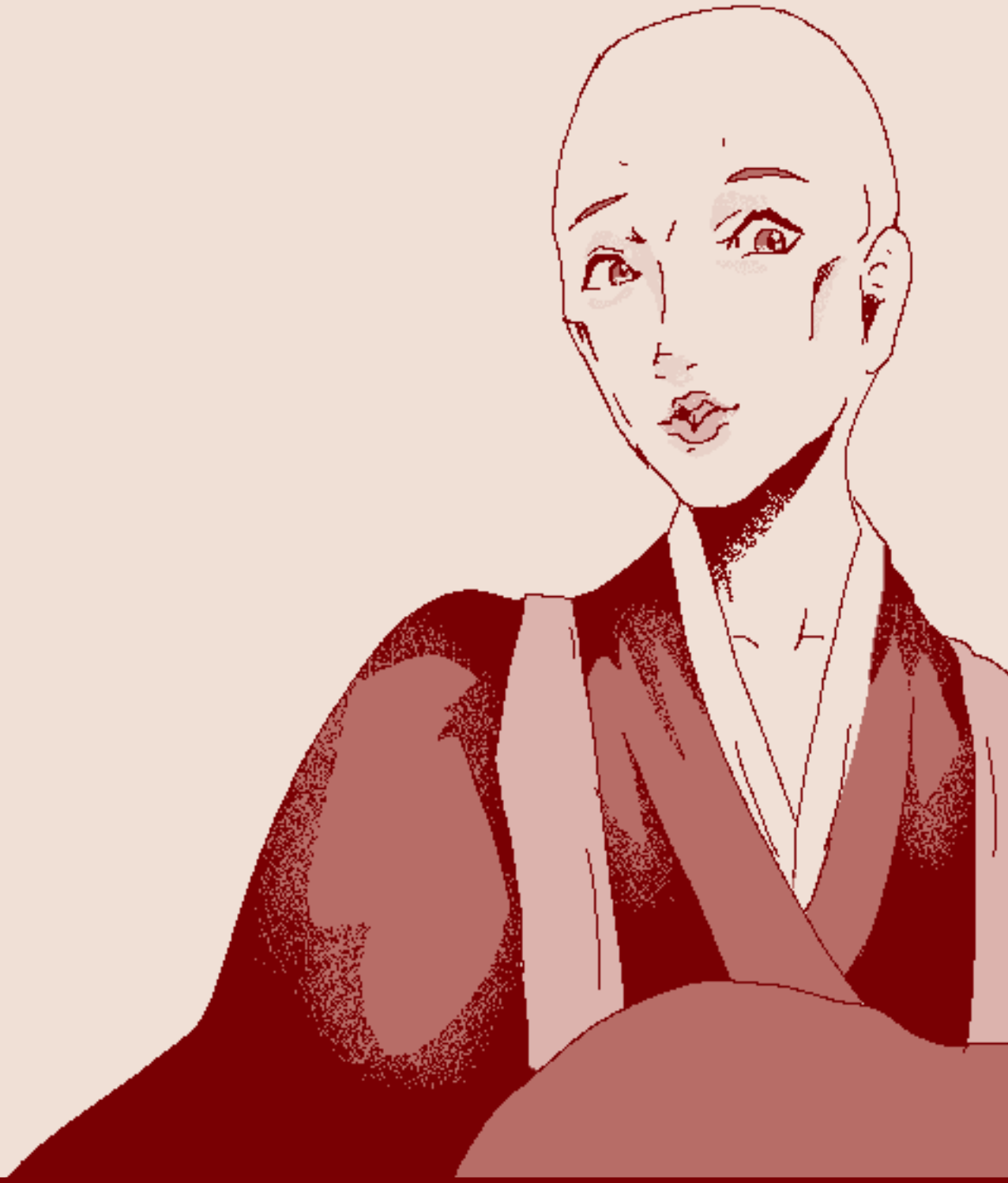
「…はい、合ってます。」

「うわあ…。」

「あら、電話があったから急いで戻れば、これは、可愛いお客さんだ事♥」

…浄光寺の日舜は所謂オネエ系の和尚であった。

「…また濃いのが来たなあ。」





「あしひきの 山のしづくに 玉はよし 君が御魂の かへり来ませる。」  
 「石走る 垂水の上の さわらびの 萌え出づる春に なりにけるかも。」  
 「春されば しなざるべき 御魂かも いや常磐に あり通ひける。」  
 「いにしへに 恋ふる鳥かも 弓弦葉の 御魂呼ばへて 鳴く声聞こゆる。」  
 「ももしきの 大宮人は 大舟に 御魂乗せて いざ漕ぎ出でな。」  
 「あま雲の たなびく見れば 我が御魂 ありやとぞ思ふ 君が形見に。」  
 「うつせみの 命を惜しみ 走り出て 御魂を呼ばふ 声のさやけさ。」

発端の事件被害者の徳田 重蔵を伽夜子は神域に連れて行き、祝詞を数時間上げ、日も落ちた当たりでようやく終わった。

後ろで事件の担当刑事と神主も同席させられていた。

「これで、反魂の術は完了だよ。」

暫くすれば重蔵氏も目を覚ますよ、あっさっさと護摩焚き消してくれたまえクソ暑いし。」

(あの姉ちゃん、まともな恰好もできたんだな…。)

(というか護摩焚きって密教系じゃ…。)

「聞こえてますよ。」

利けばいいんですよ利けば、日本なんてそこら辺もう明治でごっちゃになったからなんでもいいんですよ。

それより、頼んだのは調べてくれましたか？」

「え、ああ？あの…絶対他言無用でお願いしますよ？」

被害者勝手に連れ出したり、内部資料持ちだしたなんて半分公的依頼ですけど俺の首で尻尾切りされるんですよ。」

「あら、そうですか？なら今すぐ腹括ってくださいね。」

それより着替えるから向こう向いてください。

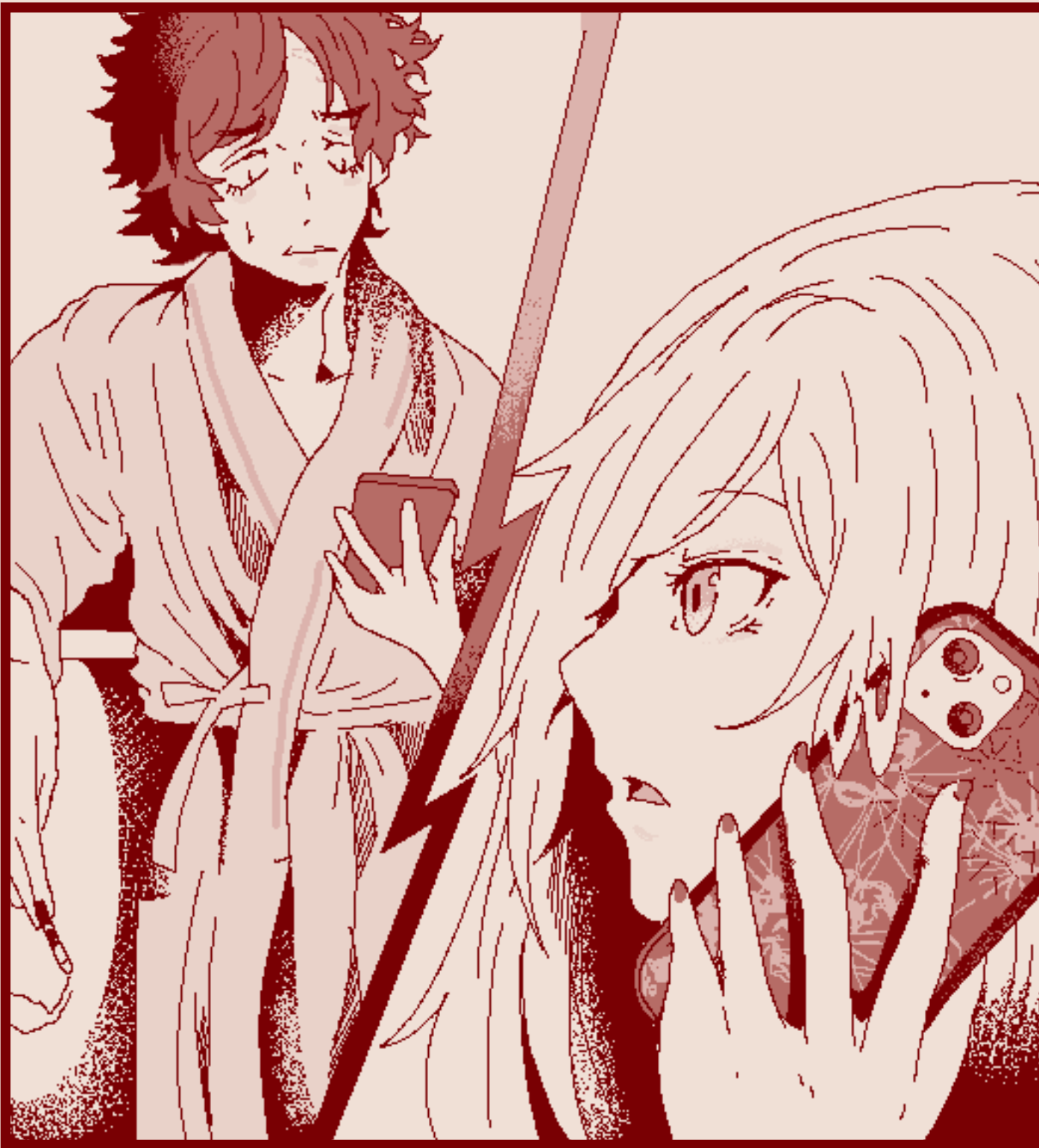
見物料は億になりますよ？」

(10代の姉ちゃんに言い様にあしらわれるの辛い…。)

(最近の若い子のキツさはどこもそんなもんだよ…)

というか、関わり合いになりたくないから小都華ちゃんに頼んだのがつつり巻き込まれてる…。)





「ふむ…。」

伽夜子は警察の資料に目を通し、考え込む。

「どう思います？これ？」

「確かにこれを担当させられるのは、ご愁傷様と言った有様ですね。」

「同情のお世辞でもそう言ってもらえるとありがたいよ。」

「お世辞じゃないですよ。」

それよりこの…そうこの項目の人に聴取できてます？」

「いや、実家尋ねたんですけど誰もいなくて…娘さんもある筈なんですけど今探してる  
ところ。」

「ふむ。このひとの連絡先なら知ってますよ。」

娘さんがいないのは今頃かき揚げでも揚げてるんじゃないですかね。」

「は…？かき…？」

「いやぁお久々です。ええ、いえいえ以前も言った通りその節はこちらが世話になり  
まして、柳玄さん。」

「鞍馬 柳玄？ああなんか珍妙な事やってる…そういえば今探偵事務所？やってる…  
えっ何このチラシうさんくさ…。」

「なんか今入院してるらしくて、あんなんだから近所のひとからも中々話聞けなくて  
な。」

『徳田 重蔵？ああ資産家の？やったやった除霊、そうそうあお、権田 徳三郎？さん  
かもいたな。』

成程ね…確かに妙な感じだったかなあ。

そうそう案山子だろ？

だけど本人は正幸を除霊してくれって言っててさあ。

除霊自体は上手くいったんだけど、伽夜子ちゃんなら分かるでしょ、あの淀んだ  
嫌な感じ、アレが全然晴れなくてさあ。

その後も数回、正幸を除霊してくれって依頼してきて、頭おかしくなってんのか面  
倒な事なののかどっちだろうしな。

將軍も嫌な予感すっからって手引けって言うもんだから、それ以降は連絡絶った  
し、りんねにも関わるなって釘刺しておいたけど？

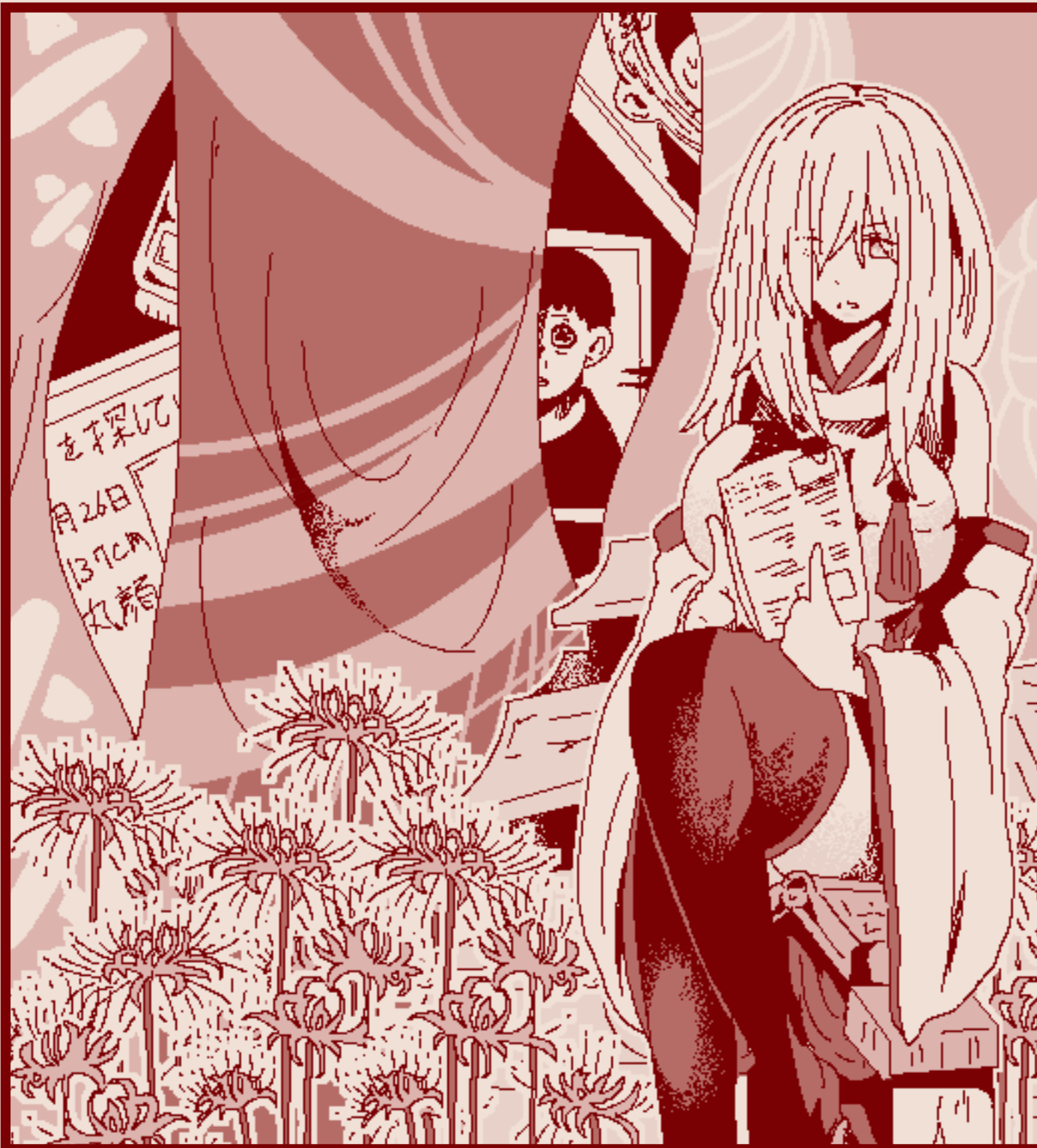
伽夜子ちゃんも月彦君も悪い事言わないから関わるのやめといた方がいいぜ？  
おっちゃんの勘ってあたるから。

おう、まあ無理しない程度に頑張んな。

えっ？この間のお礼で渡した饅頭どうだったか？えっ…りんねから何も…あ、ちょ！  
詳し…。』

「ふ〜、さて、話を整理しようか。」

「「…。」」



「この話の起こりは、昨年度の柳玄さんが被害者2名の除霊を行っている事。

その時の正幸という人物。

これは、徳田 正幸さんの事だと思われます。

徳田 正幸さん、この方は重蔵さんの同年代従兄であると思われます。」

「だが、その方は…。」

「そう、正幸さんは昭和 38 年、10 歳の年齢で失踪している。 その正幸さんをわざわざ 60 年近く経っているこのタイミングで除霊をしようとしている。

証言が正しいなら最初の被害者である徳三郎さんが重蔵さんに案山子について相談し、そこから柳玄さんへ除霊依頼。

つまり彼らは案山子と正幸さんとの関連性を知っているという事です。

更に、そこから不可解ですが数度、正幸さんの除霊依頼を柳玄にしている。

これを拒否されてからは、外部委託で SNS 及びこれまた懐かしいテレビ番組での失踪者捜索番組で正幸さんの捜索。

そして…しばらくしてから蛇穴村に戻り大国国会議員と面会している様子の証言がある。

同時期に蛇穴村でも案山子の目撃例が今ほどではないが出始め、大国議員の周辺に数日後には件の焼死遺体事件。

事件性マシマシなのに、早期に自殺と判断された。

あそこの県警のお偉いさんは大国議員との蜜月な関係が噂されてるが、そこはそちらの方がお詳しいかな？」

「…。」

社のひとつから、ニュッとブシアグモンが顔を出した。

「おう、戻ったぜ伽夜子ちゃん。」

「「うお!?!」」

「なんで、紹介してなかったのかい？」

「これがデジモン…いや、すまない話は聞いてたが、実物を突然見ると流石に…。」

「おっと、そりゃあ悪かったな。

ところで伽夜子ちゃん、早急にここを離れた方がいいぜ。」

「なんだい、やらかしたのかい?らしくないじゃないか。」

「無茶言うぜ、これ見てみな。」

ブシアグモンが重蔵の身体を持ち上げる。

「…なんだこれ?検分でもこんな痕跡なんて…。」

そこには蛇の目のような痣が浮かび上がっていた。

「というか…その、ブシアグモンさん?は何しに?」

「反魂の術は、祝詞でネットワークを繋げてデジモンが魂の場所まで行ってこっちに引っ張り戻す。」

「ああ!ああ!撤収準備しながら聞きな、時間ねえんだ。

こういった事をする時はだいたいデジモンに喰われてるからバラバラなんだが、このおっちゃんのデータ丸々残ってたんだ。」

「ほう…。」

「発見した時に気付いたんだが、周りのデータに全て監視されていた。

感知的には確かに腹の中だったが、ありゃあ蛇だ。」

「蛇って丸呑みって事?」

「消化までに時間が掛かるんだろうが、こっちを監視してた連中はどっちかっていうと共生に近いだろうな。」

「案山子には似てるけど別の思惑があるって事かい?」

「お…も!このおっちゃん太りすぎだろ!調査に行った月彦ちゃん達に連絡取り…な!

思ったより厄介かもしれねえぜ、この事件。」



時を少し遡り、月彦達は浄光寺の日舜に話を聞いていた。  
「ごめんなさいねえ、急だったから何も用意できなくて。」  
「いえ…それより、何で僕らをここに…？」  
「気が早いのね♥草食系に見えて意外とがっつくのね♥」  
「なんや…ウチらセクハラされに呼び出されたんか？」  
「あらやだ、私ったら♥久々に好みの子と話せて舞い上がっちゃった♥ごめんね♥盗ったりしないから安心してね♥」  
「はは…。」「ば…ばかか!ちゃうわ!!!生臭坊主!!」  
「あらあら♥  
…それじゃあ、真面目な話に切り替えるわね。  
ここだけど、あの村で上の連中が起こしたトラブルの文字通り駆け込み寺ってところ。」  
「なんで同じ村のうて隣市なんや？」  
「…あなた達を呼んだのもそれを含めてあの村についてお話するためよ。」





「あの村で事が始まったのは1782年、天明2年。」

「…江戸時代？」

「天明の大飢饉ですね。」

「そう、蛇穴村も例外なく食料難に陥ったわ。」

その打開策とした出されたのがミシャクジ様への生贄よ。

夏のこの時期に子供をひとり案山子に見立てて厄から遠ざけてたと言われてたわ。」

「嫌な話やな。」

「そうは言っても時代も時代、状況も状況。」

みんな生きるのに必死だったもの、それを否定するつもりはないのよ。

…でも、問題は。」

「デジモンの力で本当に効果があったしまった…。」

「飢饉でありながらも蛇穴村は、豊作であったわ。」

足を知るの人は地上に臥すといえども、なお安楽なりとす。

でも、人間は身の丈以上の欲を求めるのが世の常。

飢饉が治まっても村の発展を大義名分にこの儀式を続けようとする者…分かっていると思うけど上の連中よ。

神事を請け負い、村の発展と掲げた彼らに私達のご先祖様は反対したみたいだけど、結果は…。」

「村は生贄を容認し、日舜さんの先祖を村から追い出した。」

「口を上げずとも生贄に否定的だった村人とこの土地の方達の支援で彼らの横暴へのアンチテーゼとして、ここに根を張ったわけね。」

「そもそも上と下に分ける連中やし、自分達から生贄なんて出さんかったちゅうわけか。」

「ええ、ただ…今の話、正直私も眉唾だったわ。」

上の連中の横暴は確かにあったけど、もう生贄なんてあるわけない、もっと現実的な部分での村内の対立の互助組織くらいにしか思ってなかったわ。」

「ウチらが現れるまでって事やな。」

「…というよりも見ない振りをしていたのかもしれないわね。」



身長:160cm  
普通体型

昭和52年8月10日



「去年、平田 克也君という子がいなくなったわ。  
それから全てがおかしくなったわ。」



を探しています





# Digital NEWS

## 私有地の森林で焼損遺体発見

### 死体遺棄が 蛇穴村

案山子が現れ、あの胡散臭い狐目の男が現れ、焼死遺体の事件、それだけじゃない村で不可思議な失踪も多発している。

業を背負うのは私達、大人であるべきなのに…。

明日の夏祭りできっと何かが起こる。

でも、関係のないひと達、なによりこれ以上子ども達に業を背負わせたくない。だから…。」

日舜が地面に頭を着ける。

「厚かましく情けない事この上ない…君達もまだ子供なのに、私は…私達ではなににもできない。

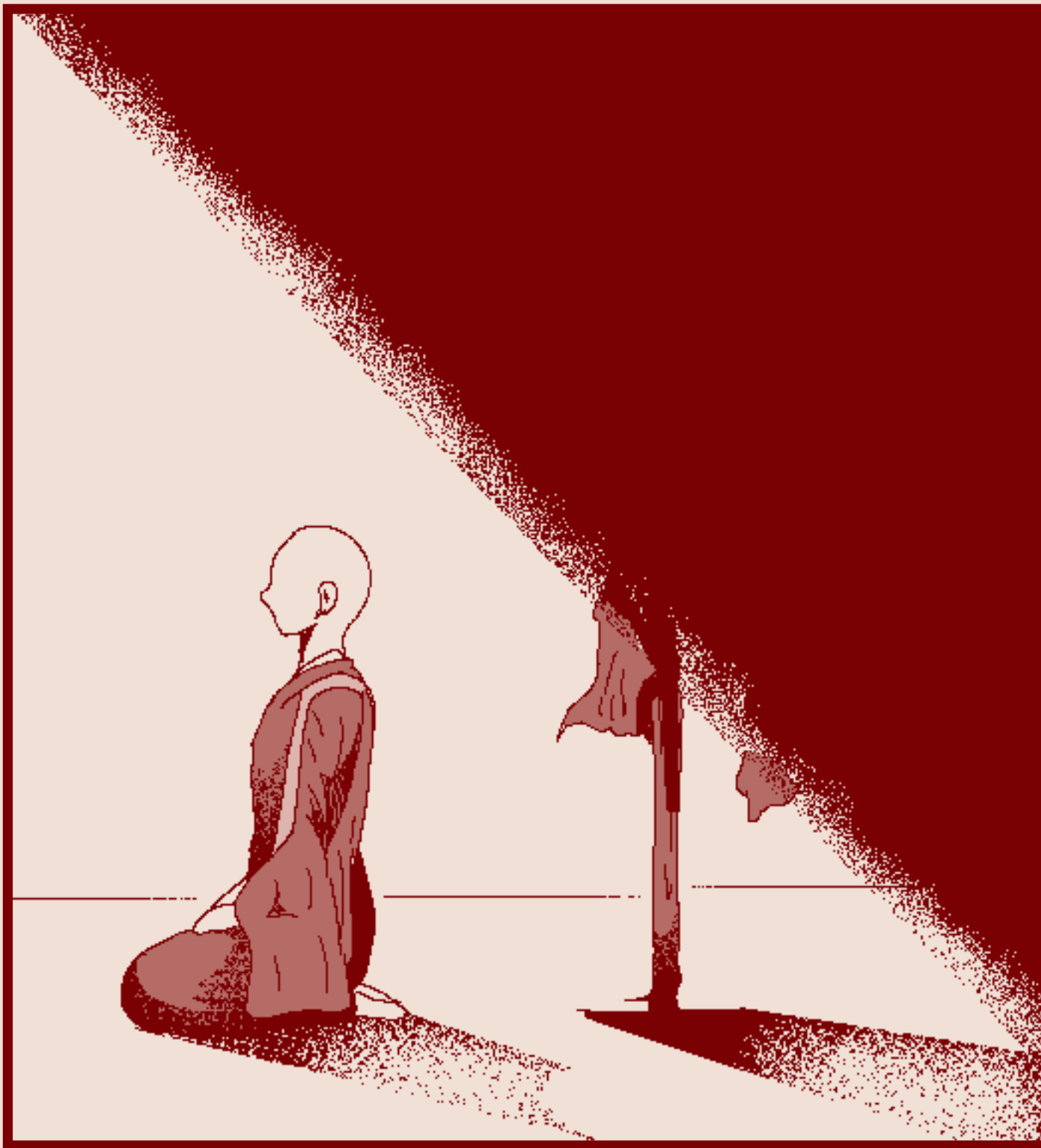
あの村を…子供達を救いそして…解放してあげて欲しい。」

「…頭を上げてください。」

「せやで、まかせとき!ウチらこれでもごつつ強いんや!必ず!!日舜さんの願い、いや…あの村救ったる。」

「ありがとうございます…本当に。」





月彦達が去り、遠く蛇穴村の方を眺める日舜の裏の影から何かが立っていた。  
日舜もそれを理解し、それに語り掛ける。

「来るのは、分かっていたわ。

    怨んでいるのよね…止めてあげられなかった私達を。」

「…なんでそんなに嬉しそうなの？」

「…ごめんなさい、そんな表情だったかしら。

    きっと、魂に刻まれて感じているのね業を。

    あの村から相談に来るひと達は苦しみを抱えていたわ。

    重ねられていく業に私は、この世がずっと地獄に思えていたわ。

    優しさ自体は一杯頂いてきたけど、結局私達も村を離れても魂はあそこにあったと  
言う事ね。

    やっと話せた本音に…最後に…あの子達の心根が優しさが…。」

「…。」

「ごめんなさいね、あなた達にこんな…。

    さあ、覚悟はできています。」

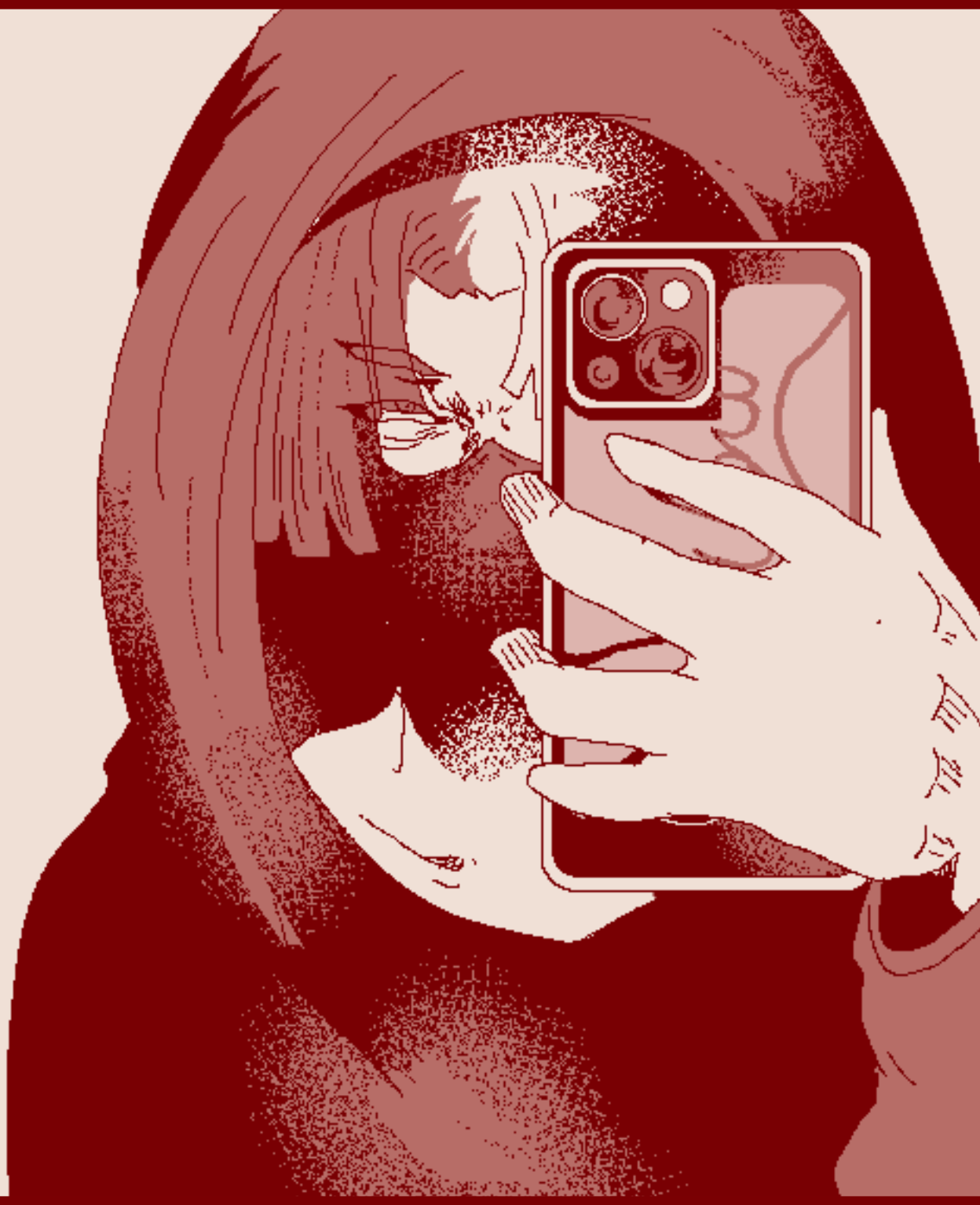
「…。」

    日舜が空を見上げる。

(不思議ね。

    何度も見上げて美しいと思った筈なのに、今が初めてみたように美しく思える。

    小都華ちゃん、月彦君、後は…。)



「でも、結局ウチらは動かんのやろ？」

「託されたものを自分でどうにかしようなんてのも驕りですよ。」

「確実に処理できるようにする事が重要、つまりは報連相です。」

「んで、伽夜子さんに連絡取れたん？」

「全く…被害者の反魂の術をしようってたので…あれ、長丁場ですし下手したら深夜まで連絡とれないかも…」

その時、ふたりの正面からシャッター音がする。

「やっほ～小都華ちゃん。」

「ゲッ、チャラ男…」

役場で小都華に絡んできたデジチューバーの男であった。

「連れないじゃん小都華ちゃん。」

な～んか君達やってるって後付けててさ、ちょっと面白い話あんだよね。」

そうやって肩を組もうとするデジチューバーの男から月彦は小都華を引っ張って後ろへ隠した。

「チッなに恰好着けちゃって？」

「いえ、個人的な話で申し訳ありませんが、今機嫌が悪いんです。」

要件…なんですか？」

「…チッ、まあいっか、実はさ。」

大国と蓮華院、またなんか企んでるみたいでさ。

前みたいに役場の住基のリスト貰ってんの。

これ、前の焼死事件と同じね。」

「「！」」

「でも、俺、あいつらに目付けられてるし、ボディーガード欲しいんだよね。」

上の焼死遺体の行く道、表道はなんか警察見張ってるし？住民の目あるでしょ？俺抜け道知ってるんだけど？どう？なんか小都華ちゃんもやってるんでしょ？」

（どうする？こいつ嘸ませると厄介な感じしかせえへんけど？）

（…伽夜子さんとも連絡取れませんし、もし…。）

（決まりやな。）

「分かりました、同行します。」



上の集落の入口は役場から行く道の一本のみである。  
入口には幅 20m、水深 2.5mの川が流れておりそこに橋が架かっている。  
更に今はこういった訳か警察の手厚い巡回というよりも見張り付きであった。  
他三方は山に囲まれ、報道された焼死遺体の場所も私有地という事で正確な位置は分かっていない。

「で、なんとか侵入しようとしてこのルート探し出したわけ。」

デジチューバーの男はほぼほぼ犯罪の自慢を喜々として語っていた。

ルートは、上への入り口の同一河川で村の別に分岐している部分から登っていき大回りをする単純なものであったが、正規のルートなら 10 分で着きそうな道を数時間掛けて回り込むというものであった。

「そりゃあ、忍び込まれる訳やな。」

(証言が正しければ、前回の儀式が行われたのは深夜帯、まだ時間はある…間に合った…。)

(ここまで着いてなんやけど、その儀式が行われるってほんまに今日なん?)

(確証はありませんけど多分。)

(なんでや?)

(祭りに関わる案山子と焼死遺体の事件は事の発生経緯が違うの恐らく別の思惑があります。)

ただ、祭りに関係していて効果を出すなら前日のこのタイミングしかないと思います。)

(なきゃないでええけど、結局はお荷物抱えての戦闘かい…。)

(究極体で一気に制圧します。)

相手の力量は分かりませんが、究極体、完全体なら数の利で制圧可能かと思います。

それにコヅキガルルモンならやってくれますよ。)

月彦はコヅキガルルモンを撫でそれに鳴き声の返答が返ってくる。

「なんやこれ？」

「ねえ～不気味でしょ？なんかふにゃちんみたいでさあ。」

そこには、岩に巨大な注連縄が載せられ周囲には御幣が何本も地面に突き刺さっていた。

「小都華ちゃん巫女さんなんでしょ？どうなんか分かる？」

「いちいちカメラ向けんなや、光でバレたらどうするんや。」

「恐らくこれは蛇を模してるんだと思われます。」

見てください、これ蛇石です。

村の境界の何十倍も大きいのですが、似たような模様がある。

そして注連縄が腹を割くように広げてあって、依り代になる御幣…紙垂に近いですね。」

「…へえ。」

「…それにこれ、そこら辺に貼ってあるこの札、反魂の札や神主のおっちゃんに見せてもらた事ある…この神札は。」





「せや、更に反魂香焚き人間に卸して燃やす。

下手な除霊の数億倍利く方法や。」

「「!?」」

いつの間にか、注連縄の上に蓮華院が座りこちらを見ていた。

「ビンゴやないか、殺人犯。

今日も一発燃やすつもりやったんやろ？」

(嘘やろ? ウチも月彦にもデジモン達にも全く気盗られずどうやって…。

いや、よく感知したらここ…なんやこの気配、異常すぎんやろ。)

(村の異常性で臭い消しされていたのか…、そもそもこの上自体が村をもう一つ区切って作った異界そのものじゃないか。)

「いやね、大国のキモデブに君らが案山子退治だけなら泳がせとき言われててん。

んな訳ないのにね、脳みそまで脂肪になって蠅集ってんのかと思っちゃうよね?」

「雇い主相手にごつつ悪態付くやん、あんたも腹だけのうて全身」

(来るから待ち構えとったんか? いや、動きを監視して? それにちゃあえらいジャストタイミングやな。

考えられるのは…。)

気付けばデジチューバーの男が蓮華院の横に立っていた。

「へっ初めから気に喰わなかったんや…。」

「雇われたのは、あの役場出た後だからハズレ。」

「報酬は、金と幾らかの知識提供、デジモン使っての商売やるんやってん、それとそこの嬢ちゃんで一発やりたいんやって。

僕は君ら使って祭り前にもう一回除霊やっときたいし三方良しやな、商売の基本や。」  
「べっウチの処女はイケメン高学歴高収入との結婚初夜って決まってるんや死ぬアホボケカス。」

「ねえ小都華ちゃん、ホラーの導入で多いの何か知ってる? それは、自らがタブーに接近する。

神域に無断で接触する輩は死ぬべきって日本人は皆んな思ってるわけ。」

「へっ正義の為だとか、この世の闇を暴くとか動画で言ってた人間の台詞かいな。)(月彦、先から黙ってどうしたん?)

(不味いです、小都ちゃんさん…デジヴァイスが反応しない…究極体に進化させられない。)

「やっと気付いたん? ウスノロやねホンマ。

「畏張ってんに決まっとるやん、進化させないよう結界張ったんや、進化情報のリロードの障害。

君らみたいに普段のパートナーを低容量で抑えようとするのは多いからね、ぱちし利いとるやん。」

「…そっちも条件は同じでしょう?」(なんとか成熟期までならいけそうです。)(こっちもや。)

「は? 何寝ぼけてん? 違うに決まってるやろ?」

「「!?」」

蓮華院が札を何枚か取り出す、そこから3体のオポロモンが現れた。

「ジェネラル…。」

「なんや知っとんか、札にして何体も保管しとん。

さて、そろそろ殺ろか。

火鱗党がひとり蓮華院天台正宗義光…末法末法殺ったるで。」

「コヅキガルルモン!」「クダモン!!!」

「進化!!!!」





「…ほう。」

ミカヅキガルルモンが大木を斬り、オボロモンの視界を防ぐ、大きさを利用し範囲攻撃とする。

視界の裏からそれに乗って、エンジェウーモンが攻撃を入れる。  
(ついつつで、セイバードラモンやない、エンジェウーモンまで進化させる事が出来た。)

ま、流石にいつもより力だせへんけどこれでええ。  
(僕達と違って常にエンジェウーモンで戦闘をしていたキャッシュ量の差が出たんだろうな。)

だが、それでいい。セイバードラモンじゃこの森林地帯じゃ上手く動けない。

下手に派手に動いて火が広がれば、関係のないひと巻き込む、僕らをここで暗殺したい向こうと上手い事目的が合致できた。)

(甘もう見てたな、どうせデジモンの力得て好奇心で首突っ込んできた調子こいたガキやと思ったけど…特に貧乏神君、手慣れとるな。)

目視のもん結界の目途にしてると踏んでエンジェウーモンの隠れ蓑にしつつ周辺ボコボコにして消そうっちゃう訳か。)

オボロモンが月彦と小都華に襲い掛かろうとしたが、大木と小都華の神札に阻まず、近づけずにいた。

(動きが中途半端なの見え見えや、こっち狙うのとエンジェウーモン達を狙うって二兎の命令に動きガタガタやないか。)

完全体のパワーと数でのゴリ押して戦闘経験値不足が丸裸や。)

(せやけど結界のタネは検討ついてないんやな、割かし杓子定規な考え、それじゃあ見つけられへんで。)

飛んでくる木材をオボロモンはエンジェウーモン事切ったと思ったが、後ろに回り込んでいた。

その瞬間であった。

ミカヅキガルルモンとの距離は離れている、オボロモン全員がエンジェウーモンと聴覚等で大木の初動を意識していた。

「!」

斬られた大木の中に月彦が紛れそのままオボロモンの背骨の部分の部分を斬り裂いた。

「なんやと!？」

(タイマー自ら…!?たまにおるがそりゃあ相手タイマーか良くて成熟期までやろ!?完全体に突っ込んでくるキチガイなんているんかいな!?)

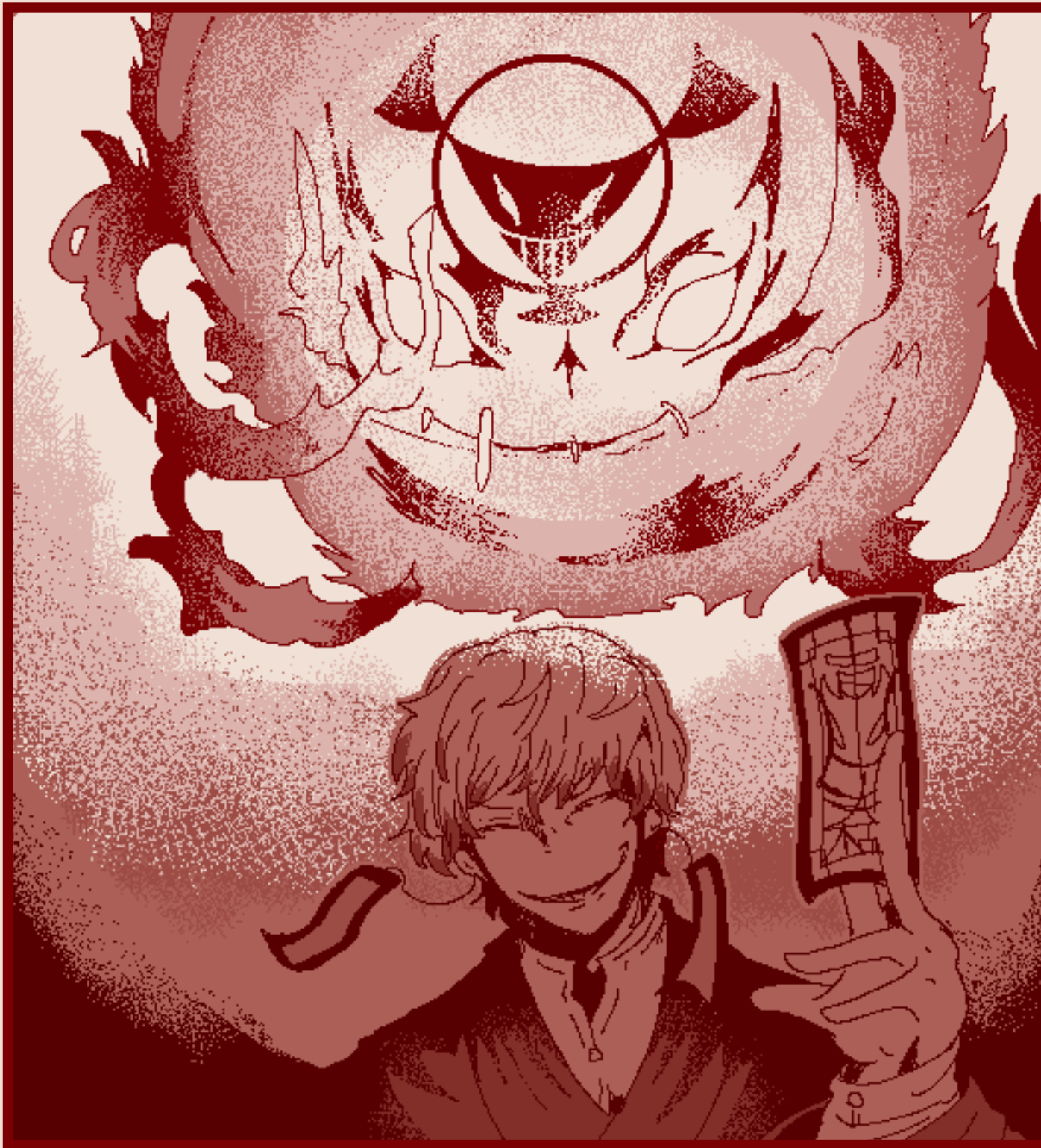
「!…しもた!!!気取られな!!馬鹿共!!!」

予想外からの攻撃にオボロモン達の動きが一瞬止まり隙が出来た。

他の2体のオボロモンもミカヅキガルルモンとエンジェウーモンに致命傷を受けた。  
(身体能力はともかくとして、攻撃力の原因はあの鉈の呪具かいな…。)

よう見たらあの札でデータ構成バラバラにしとるんか。

鉈自体はそれを隠蔽する事に特化した作りかいな。  
…つまり、あの貧乏神君自体はただの人間やな…。)



月彦達は蓮華院達を見据える。  
「なんや、その勝ち誇った顔ごつつムカつくな。」  
（動揺して結界に意識を向くのを期待してんやろうな。）  
「ま、ただ死ぬで君ら。」  
「「!!!????」」

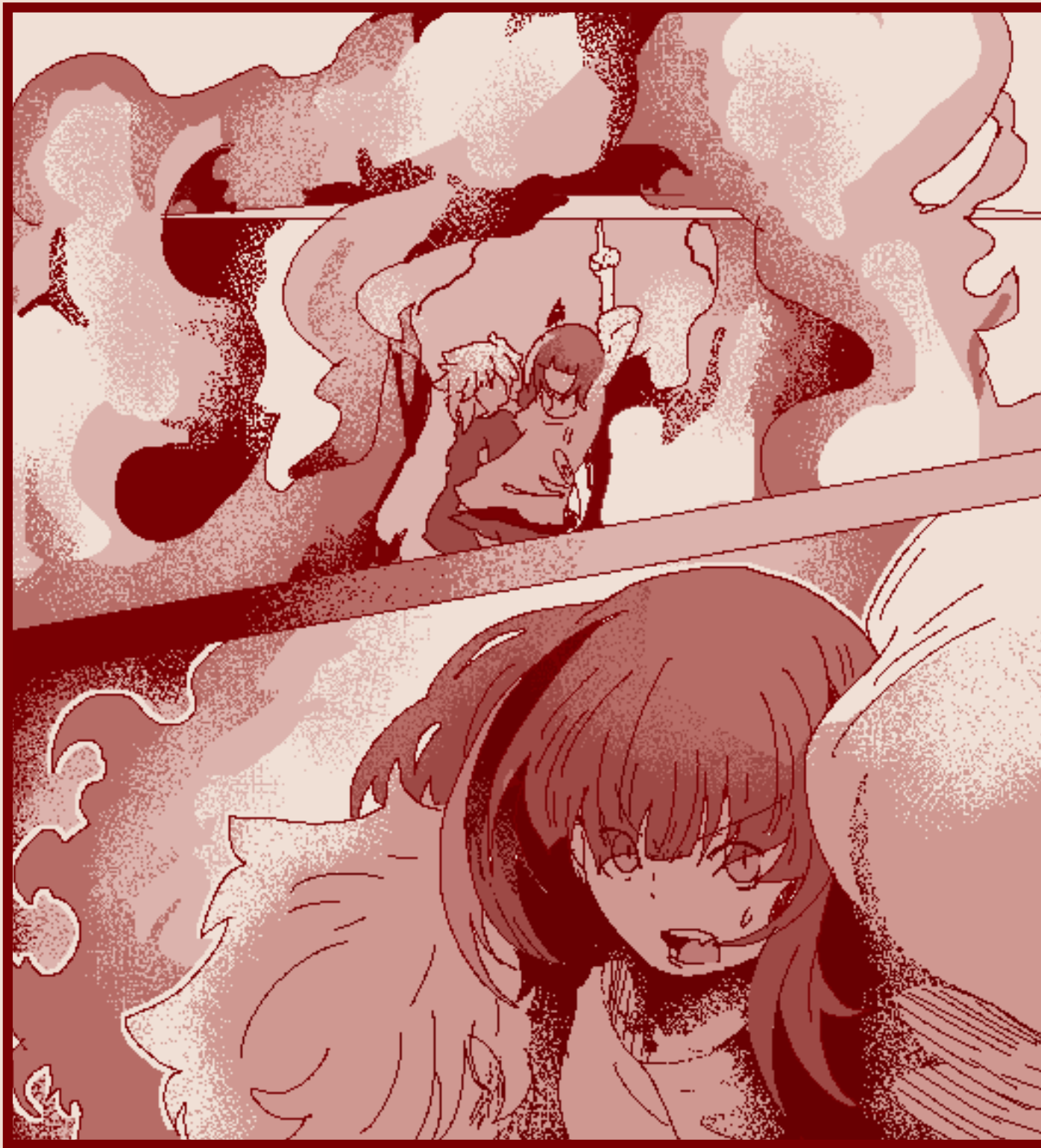
蓮華院が札を構えデジモンを召喚する。  
「なんや…あれ。」  
一気に周辺が昼間のように明るくなる、急激に温度が上がり木々の一部が燃えだした。  
（…!）  
「小都華さん!エンジェウーモン!僕達の後ろに!!!」  
「これでも一部だけなんや、逆に全部なんて持ってきたら日本全体が殺す事もできるんやで？」

万象を照らす炎の王よ!  
今、星の囁きに応え大地を煉獄へと変えよ!!  
究極体!ソルメラモン!!!!」

現れたのは正しく太陽そのものであった。  
他に形容しようがない、付け加えるならそこには真偽・善悪を問わず全てを焼き尽くす超然の力であった。  
「まずいで!!!???何か手はあるんか!!!???」  
「結界が消えています!ソルメラモンのリアライズのためか!それとも!!!」  
（結界を消した?それともアレの召喚で結界を維持するためのものを向こうが失くした?…いや今は!!!）

月彦がデジヴァイスを頭上に掲げる、するとデジヴァイスが浮く。  
「死ねや、メラメテオスラッシュ。」  
月彦が端と端を指さす。  
「静かなる闇夜を照らす銀の灯火よ。  
星の囁きに応え、力を解き!放つ!!!  
きゅ…くっ!!!!!!」





ソルメラモンの絨毯爆撃が進化を完了するガッコウガルルモンへ襲い掛かる。  
背中のプレートが回転し爆撃を弾いていく。

「月彦不味いです…！進化途中とは別に何か…あのソルメラモン…！こちらの力を阻害している…！」

（結界と同じ…？また別に…？…!!!）

ガッコウガルルモンの背中のプレートが割れ、絨毯爆撃がモロに撃ち込まれていく。

「エンジェウー…クダモン？」

「小都華…ごめん…力が出ない…」

「!!!」

小都華へ直撃するかと思われた爆撃を月彦が庇う。

「にげ…。「月彦!!!」

「んな事したら…女が廃るんや!!!」

小都華が神札を展開し月彦達の壁になるように展開する。

（あかん…！こんなに展開した事なんて…ないし…そもそもこの爆撃…耐えられへん!!!）



「あ～あ貧乏神君見捨てて逃げればワンチャンあったのに、これだから甘ちゃんの小便臭いガキは…馬鹿で御し易くて助かるは。」

「ふざ…けんな…や!!!!」

神札が焼けドンドン剥がれていく。

(あかん…ここまで…。)

案山子があった。

視覚、聴覚、五感の全てが騒がしく渦巻く中でその案山子で静かにそこにあった。

その温度差に全員が気づき、振り向いた。

「…。」

「があああああああああ!!!!!!」

「…なんや…?」

ソルメラモンの炎が蓮華院に移り悶え苦しんでいた。

蓮華院の力が落ちた事により、ソルメラモンのリアライズが解ける。

「今や!悪いが気張れ!!クダモン!!!進化や!!!」

「…!まかせや!!!」

クダモンがセイバードラモンに進化し、小都華達を抱え飛び上がる。

「クソが!!!」

蓮華院がシードラモンをリアライズさせ炎を消す。

デジチューバーの男が駆け寄ると蓮華院が肩を掴む。

「なっ。」

「しゃあない、君には最後まで付き合ってもらおうで。」



セイバードラモンの進化も長続きせず、村の端までは飛べたが、そこで力尽きクダモンに退化した。

「ごめん…小都華…。」

「ええで、よう頑張ったやん…。」

「生きとるか…月彦…。」

「大丈夫です…。」

小都華も先の戦闘で疲れ果てヨロヨロと歩き始めた。

…

このタイミングで神域からの撤退をする際の伽夜子からの連絡があった。

「小都ちゃん？これ月彦君の番号だと…。」

…っ。

「ごめんなさい、小都ちゃん巻き込んでしまって。」

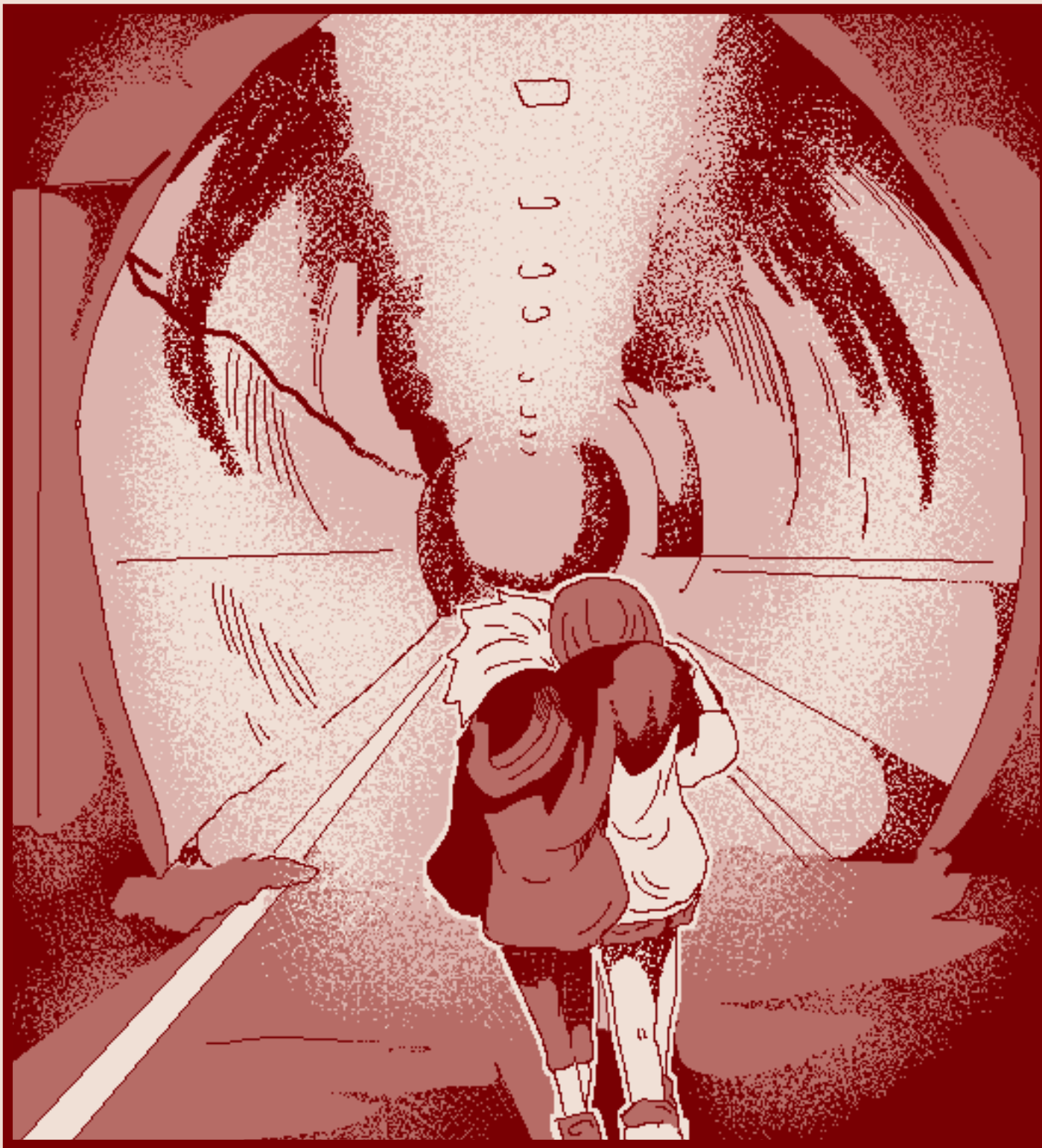
『ええよ、ウチかてこういうリスク込みでも手伝いたかったんや。』

あと、月彦は火傷おっとるけど命に別状はないみたいや、回復フロッピー結構持ってきて良かったみたいや。』

「…ありがとう…そっか、なら早く安全なところに…、すぐ私も。」

『それやけどな、伽夜子さん…。』





「出れへん…。」

村の唯一の入り口であるトンネルを抜けようとしたが、気付いた時には村へ出ていた。

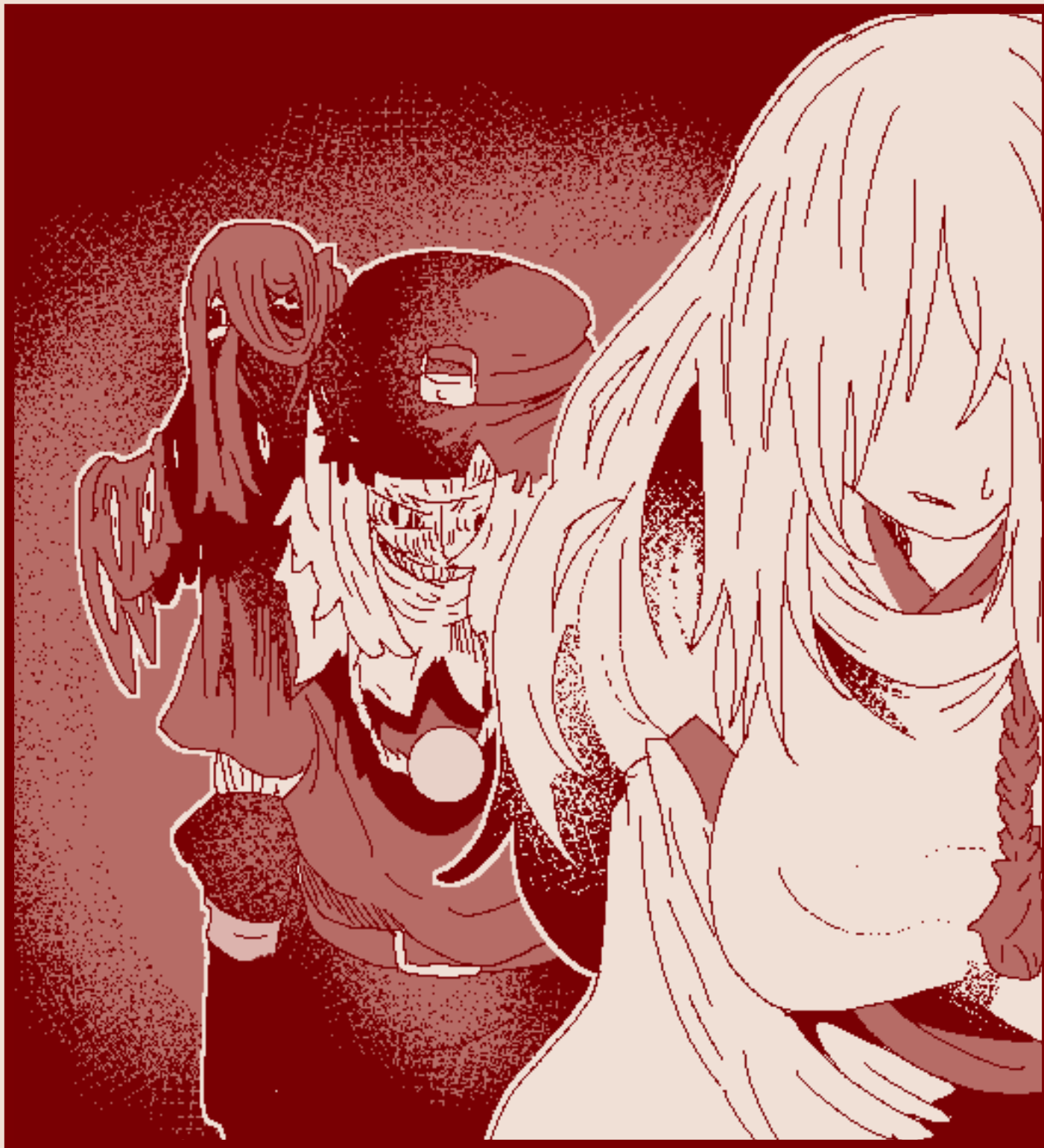
『…！』

小都ちゃんすぐに移動した前、どういった力か分からないけど今の君達では多分無理だ。

今、隠れられる場所のマップをデジラインで送るそこに潜むんだ。

すぐに…行くから！危ない事だけはしちゃだめだよ!？」

「…っ。」



「…。」

「伽夜子ちゃん、落ち着きな。」

「落ち着いてなんか…っ。」

「気付いたかい？ゆっくり落ち着いて構えな。」

後ろに気配があった。

そこには、案山子が立っていた。

『すまん…伽夜子さん。』



小都華は自身から油汗が出てくるのを感じた。  
「もう危ない目遭うてるな…これ。」  
そこにも、案山子が立っていた。